

富山市

鶴坂 I 遺跡

発掘調査報告書

2008

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市婦中町鵜坂地内に所在する鵜坂Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、タカノ興発株式会社（代表取締役社長 高野二郎）が施行する「鵜坂の里」住宅団地造成に伴うものである。富山市教育委員会埋蔵文化財センター指導監理のもとに山武考古学研究所が実施した。
- 3 遺跡の所在地、調査面積、調査期間、調査担当者は下記の通りである。

所在地	富山市婦中町鵜坂51番地 外
調査面積	321m ²
現地調査	平成19年11月5日～同年11月16日
整理調査	平成20年4月1日～同年4月30日
調査担当者	平岡和夫・藤田登・田中寿明・越智徹・折原洋一
監理担当者	藤田富士夫・古川知明・堀内大介・細辻嘉門
- 4 発掘調査及び整理作業にあたり、江尻正夫氏にご教示とご協力を賜った。記して感謝の意を表すものである。
- 5 本書の執筆は、下記の通りである。

第Ⅰ章 古川知明
第Ⅱ章 第Ⅳ章 第Ⅴ章 折原洋一
第Ⅲ章 藤田登

凡　　例

- 1 本遺跡の略記号はUS-1である。
- 2 遺構の種別記号は次の通りである。

土坑	・	SK	溝	・	SD	ピット	・	P
----	---	----	---	---	----	-----	---	---
- 3 本報告書の遺構番号は平成17年度調査の遺構番号と重複を避けるため頭となる数字に今回の調査を示す2を加えて三桁とし、201・20Xという形で表示した。
- 4 掘図中の方位は、座標北（世界測地系）を示す。
- 5 本書の掘図の縮尺は下記の通りである。

遺跡全体図	1/2,500	地区全体図	1/600
遺構実測図	土坑・溝・ピット	1/40	
遺物実測図	1/3	を基本とし、一部の大型の製品については1/4を用いた。	
- 6 遺物実測図で使用したスクリーントーンは以下の内容を示す。

 黒色処理  赤彩  スス  磨面  敲打痕

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 調査の概要	4
1 調査の経過	4
2 発掘調査の方法	4
3 整理調査の方法	6
4 基本層序	8
5 各地点の概要	9
IV 遺構・遺物	15
1 概要	15
2 12-7 地点	15
3 12-8	15
4 6-7 地点	28
5 遺物観察表	28
V 総括	33
図版	35
報告書抄録	41

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第12図 12-7地点出土遺物	15
第2図 鶴坂I遺跡平成17年度調査区	5	第13図 12-8地点全体図	16
第3図 本報告調査地点	6	第14図 SK201・202、SD201~03	17
第4図 各調査地点区域図	7	第15図 SK201・202、SD201~03断面図	18
第5図 A地区の基本層序	8	第16図 SK201・202遺物出土状況	19
第6図 B・C地区の基本層序	8	第17図 SK201土錐出土状況及び出土遺物	20
第7図 13-2・12-7・12-8・6-7地点 の平面と層序	10	第18図 SK202上鍾山上分布状況	21
第8図 3-1・3-2・3-3・3-13・2-2 地点の平面と層序	11	第19図 SK202出土遺物(1)	22
第9図 平成17年度調査A地区と 13-2・12-7・12-8地点	12	第20図 SK202出土遺物(2)	23
第10図 平成17年度調査B地区と 3-2・3-3・3-13・2-2地点	13	第21図 SK202出土遺物(3)	24
第11図 平成17年度調査C地区と3-1 6-7地点	14	第22図 SK202出土遺物(4)	25
		第23図 SD204・205、SD205出土遺物	26
		第24図 包含層出土遺物	27
		第25図 SD206・P201	28
		第26図 土錐の重量×孔径グラフ	33

写真図版目次

図版1-1 13-2地点全景 北東より		図版3-1 SK202遺物山上状況 東より	
-2 12-7地点全景 南より		-2 SK201 東より	
-3 6-7地点全景 南より		-3 SK201遺物出土状況 東より	
-4 3-1地点全景 東より		-4 SD201~3・205 北より	
-5 3-2地点 南より		-5 SD204 西より	
-6 3-3地点 南より		第4図 出土遺物(1)	
-7 3-13地点 東より		第5図 出土遺物(2)	
-8 2-2地点 東より		第6図 出土遺物(3)	
図版2-1 12-8地点全景 東より			
-2 SK202 北より			

表目次

第1表 周辺の遺跡	3	第6表 SK202遺物観察表(2)	30
第2表 調査地点一覧表	8	第7表 SK202遺物観察表(3)	31
第3表 12-7地点遺物観察表	28	第8表 SK202遺物観察表(4)	31
第4表 SK201遺物観察表	29	第9表 SD205遺物観察表	32
第5表 SK202遺物観察表(1)	29	第10表 包含層出土遺物観察表	32

I 調査に至る経緯

鶴坂Ⅰ遺跡は、平成7年県営公害防除特別土地改良事業に先立ち、婦中町教育委員会により実施された分布調査で新たに発見された遺跡である。古墳時代から近世を主体とし、105,400m²の範囲に広がる。

平成9年3月、タカノ興発株式会社による分譲宅地「鶴坂の里」造成工事が計画され、平成10年に婦中町教育委員会が試掘確認調査を実施した。対象地58,295m²のうち19,500m²に遺跡の所在を確認した。工事との調整の結果、道路部分4,480m²について発掘調査が必要と判断されたため、タカノ興発株式会社と婦中町教育委員会が平成17年3月協定を締結した。

平成17年4月の市町村合併により、発掘調査は富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理の下、山武考古学研究所が実施することで調整がなされ、平成17年5月～7月に発掘調査を実施した（富山市教育委2005）。この工事においては、宅地部分は保護盛土により保存された。

平成19年10月、鶴坂の里における個人住宅建築に伴う埋蔵文化財の取扱い協議において、平成17年の造成工事の際、タカノ興発株式会社が地震対策の要請から地盤調査で軟弱地盤と判断された区画について、本センターに事前の協議なしに保護盛土部分より下まで地盤改良が行われていた事実が判明した。このため、タカノ興発株式会社に重機提供を求め、建築予定地2区画の検証を行ったところ、地盤改良工事は地表下1mまで及んでおり、遺構面が損壊された区画1か所、遺物包含層下部まで改良が及んだ区画1か所を確認した。

このため、地盤改良を行った5区画を含む未建築の7区画についても、同様に遺構の遺存状況を確認する作業が必要と判断されたため、タカノ興発株式会社と協議を行い、①市埋蔵文化財センター職員立会の上民間発掘調査組織による掘削確認を行い、遺存状況を確認する。②掘削に要する重機はタカノ興発株式会社が提供する。③遺跡の損壊が認められる場合は引き続き発掘調査を行う。④調査等に要する経費はタカノ興発株式会社が負担することとし、この方針について11月1日付けで市教委、タカノ興発株式会社、山武考古学研究所の三者で協定を締結した。

検証作業の結果、2区画は遺構面から20cm下まで地盤改良が及んでおり損壊が確認された。他の2区画は遺物包含層10cmまで地盤改良が及んでいた。残る5区画は遺物包含層・遺構が保護されていることを確認した。以上の結果に基づき、損壊が確認された2区画は全面遺構検出作業を行ったが、遺構は確認されなかったため、検証調査を終了した。遺物包含層まで地盤改良が及んでいる2区画については、遺構面まで10cm以内となり遺構が保護できない状況が生じたため、発掘調査が必要と判断された。このため、この2区画については、建物建築部分計128m²分を引き続き発掘調査を実施することで協議が整った。

発掘調査は平成19年11月14日まで行い、同日付けでタカノ興発株式会社へ引渡し、すべての作業を完了した。その後平成20年8月30日まで整理・報告書作成を行った。なお調査は、タカノ興発株式会社の全面的な協力により円滑に完了した。

(古川)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

鶴坂Ⅰ遺跡は、富山県富山市西部の神通川左岸沿いに位置する。なお、合併以前においては婦負郡婦中町に属していた地区となる。遺跡のある地域は東を神通川に、西～北を呉羽山丘陵に、南を神通川扇状地に囲まれた低地帯で、この低地帯の中央には神通川支流の井田川が西南から東北方向に向かって走流し、この井田川と神通川に挟まれた地区に本遺跡は立地する。当地区には南東から北西方に走流する神通川の旧河道が複数認められ、神通川の氾濫を受けやすい地形を呈していたことが理解できる。

遺跡内は、神通川沿いの低地帯とその西側に接して南北に走向する台地からなる。低地帯は現状においては平坦となるが、平成10年度の試掘調査および平成17年度の発掘調査の結果より神通川沿いの東側に微高地が、中央部に埋没谷が確認されている。埋没谷の西に南北方向に走向する台地が存在し、台地の西側には旧神通川の河道が走流していることが知られる。遺跡はA～Cの3区に分かれ、A区が遺跡北東部の微高地上、B区が西部の台地上、C区が遺跡南東部の微高地上に位置する。

2 歴史的環境

周辺は、旧石器時代から中・近世までの各時代の遺跡が存在するが、その分布は時代ごとに偏在性が認められる。

旧石器時代から縄文時代中期にかけては、本遺跡の北～西方に存在する呉羽山丘陵や射水丘陵裾部台地上に集中して分布し、縄文時代晩期では神通川の東の扇状地から低地にも分布する。

弥生時代から古墳時代にかけては、沖積低地にも集落遺跡が見られるようになり、本遺跡の北～西方の丘陵上に王塚古墳、勅使塚古墳を含む「国史跡」王塚・千坊山遺跡群、杉谷古墳群など多くの古墳・墳丘墓が構築され、県内でも有数の古墳密集地域となっている。王塚古墳・勅使塚古墳は県内最古級の大型前方後方墳で、それより先行する時期には六治古墳墳墓、宮崎墳墓群、杉谷4号墓などの山陰地方との文化接触を物語る四隅突出墓を中心とした墳丘墓群が検出されている。古墳時代後期には呉羽山丘陵斜面に番神山横穴墓、金屋陣ノ穴横穴墓などの横穴が構築されるようになる。本遺跡ではB・C区より古墳時代の遺構・遺物が検出されており小規模な集落の存在が想される。

古代では、低地部にも多くの集落が形成されるようになり、律令期の国郡制のもとでは婦負郡の郡域に相当する。婦負郡は「和名類聚抄」によると十余の郷名が知られるが、史料的に裏付けられる例は少なく、平城京山上木簡により川合郷のみ確認される。本遺跡周辺は大桑郷・高鶴郷・笠本郷のいずれかに該当することが想定されている（藤田富士夫2002）。本遺跡の名称となる鶴坂という地名は万葉集中で越中守大伴宿祢家持が詠んだ「婦負郡の鶴坂河の辺りにして作る歌一首」に見られ、当地にある鶴坂神社は『延喜式』の神名帖に式内社として記載されている。鶴坂神社の北方に位置する本遺跡ではA～Cの各区より微量ながらも遺構・遺物が存在し、中でもA区においては烟壙や土坑・溝が検出されている。

中世になると、本地域は新潟県小千谷市魚沼神社所蔵の大般若經嘉慶二年（1338）五月付の奥書「婦負郡宮河荘鶴坂社」などによって徳大寺領官河荘の荘域内と推定される。推定される官河荘内の中世

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	鶴坂I遺跡	古墳・古代・中近世	集落・生産地	11	持田I遺跡	古代・中近世	集落
2	鶴坂寺遺跡	中世	寺宇	12	中名II遺跡	古代・中近世	集落
3	宮ヶ島II遺跡	中近世	散布地	13	中名I遺跡	古墳・古代・中近世	集落
4	安田城跡	中近世	城館	14	道場I遺跡	中近世	集落
5	友坂遺跡	縄文・古代・中近世	集落・城館	15	清水島II遺跡	中近世	集落
6	砂子I遺跡	古墳・古代・中近世	集落	16	堀I遺跡	中近世	墓・塚
7	袋遺跡	古代	散布地	17	堀II遺跡	近世	集落
8	道場II遺跡	中近世	集落	18	金原南遺跡	古代～近世	集落・墓・生産
9	中名VI遺跡	古代・中近世	集落	19	羽根下立遺跡	縄文・弥生・古代～近世	集落
10	中名V遺跡	古墳・古代・中近世	集落				

遺跡としては本遺跡南方に所在する清水島II遺跡、中名I・II・V・VI遺跡、持田I遺跡、道場I遺跡、道場II遺跡等が知られ、そのうち道場I遺跡では中世莊園の物流拠点的遺構群が検出されている。本遺跡では平成17年度の発掘調査でB区より掘立柱建物・井戸・土坑が検出され、小規模な集落が存在したことが明らかとなっている。また、中世城郭では、豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際の陣営となつた白鳥城、その支城の安田城（国史跡）や大畠城などが存在する。

(折原)

III 調査の概要

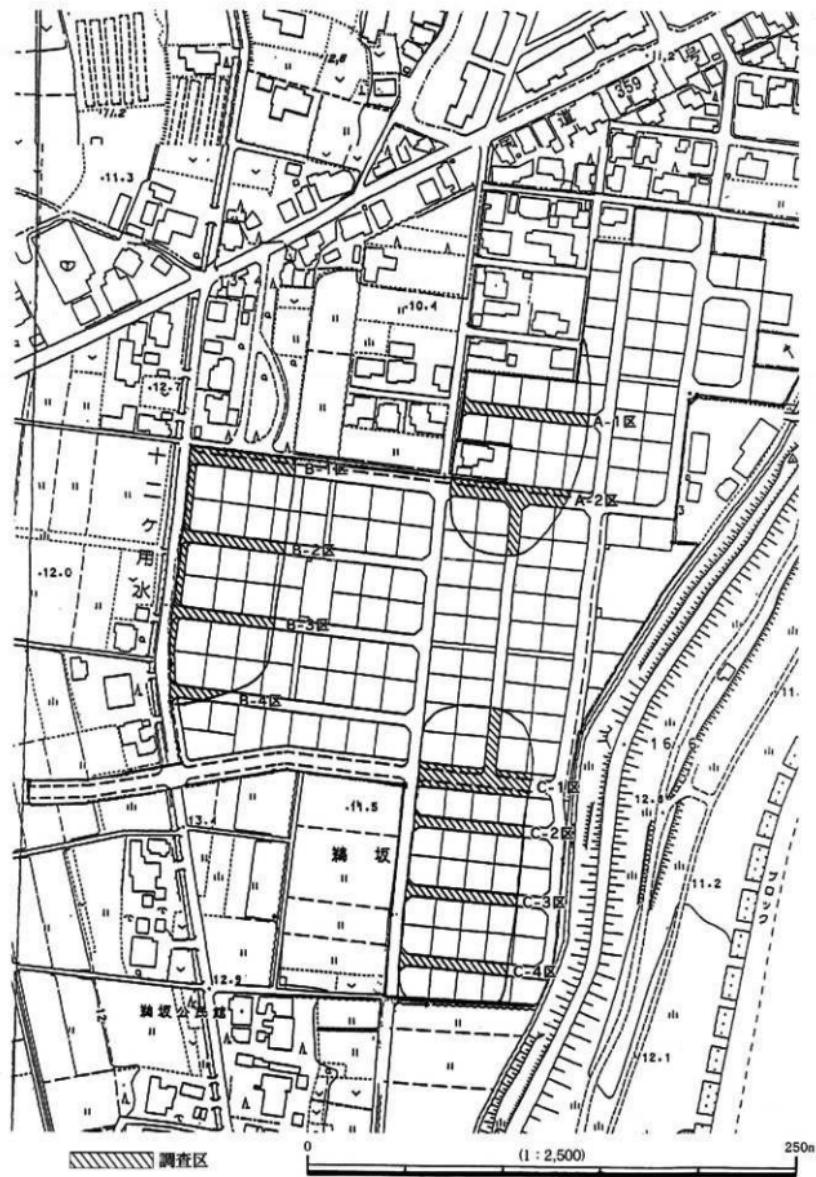
1 調査の経過

発掘調査は、平成19年11月4日より開始し、同年11月16日に終了した。

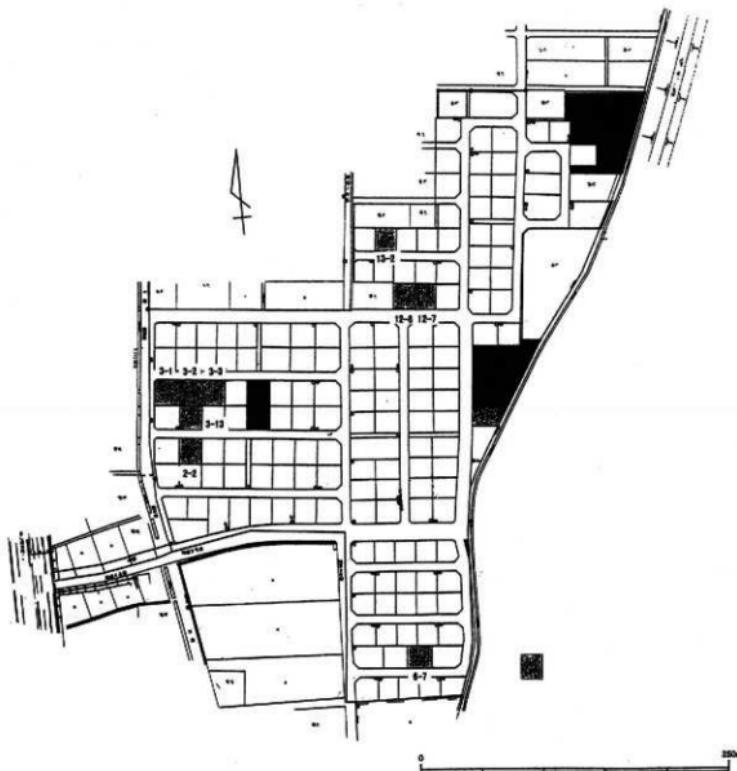
- 11月4日 発掘の準備を行う。
- 11月5日 盛土・表土除去は13-2地点より開始し、13-2、12-7・8地点を終了する。
- 11月6日 2-2、3-1・2・3・13、6-7地点の表土除去作業を行う。
- 11月7日 12-7・8地点の包含層掘り下げを行う。
- 11月9日 12-8地点の遺構調査を開始、12-7地点の調査を終了し、3-2・3・13、2-2地点の精査を実施、遺構や遺物包含層が無いことを確認する。
- 11月10日 12-8地点の遺構調査を継続する。
- 11月13日 12-8地点の遺構調査を継続する。
- 11月14日 12-8地点の調査を終了する。12-1・2・3、6-7地点の埋め戻しを開始する。
- 11月15日 各地点の埋め戻しを終了する。
- 11月16日 機材等撤収し、調査を終了する。

2 発掘調査の方法

発掘調査は、宅地建物建設予定地9地点を対象として実施し、盛土及び表土除去後、遺構と遺物包含層の有無を確認し、宅地造成による削平が遺物包含層を保護できない深さまで掘削される場合、本調査を実施した。その結果、12-7・12-8・6-7の3地点で遺物包含層が確認され、13-2、3-1・3-2・3-3・3-13・2-2地点では遺物包含層及び遺構は確認されなかった。遺物包含層が確認された3地点の内、造成時の削平が遺物包含層の影響を及ぼす12-7・12-8地点が本調査対象となった。



第2図 鶴坂I遺跡平成17年度調査区



第3図 平成19年度調査地点

調査地点名は建設予定の宅地区画名をそのまま用い、所在地と調査面積及び平成17年度発掘調査の区名との対応は第2表の通りとなる。

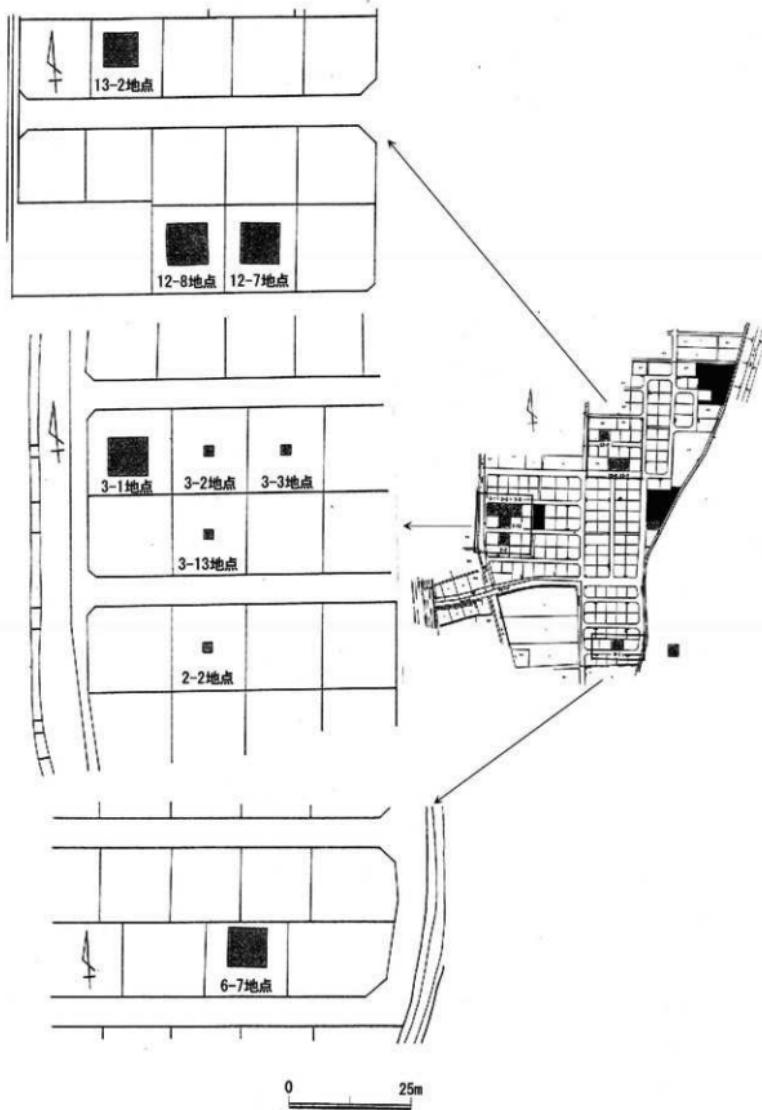
グリッドは平成17年度発掘調査区のグリッドを踏襲し、全ての地区を覆うように公共座標を用い10m×10mのグリッドを設定した。呼称方法は大グリッドの東西軸を西よりアルファベットでA・B・C・・・、南北軸を北より00・0・1・2・3・・・として西北の交点を代表させた。

表土は重機を用いて除去し、遺物包含層掘り下げ及び遺構確認作業は人力を用いて実施した。遺構平面図及び断面図は1/20を基本縮尺とした。写真撮影は35mm判白黒ネガ、35mm判カラーPジ、6×7判白黒ネガを使用した。

3 整理調査の方法

整理調査は、発掘調査で得た資料・遺物を対象にして実施した。

出土遺物は細片に至るまで全量水洗いした後、インクジェットプリンターを使用して注記した。但し、注記不可能な微経片については注記したボリ袋に収納した。



第4図 各調査地点区域図

第2表 調査地点一覧表

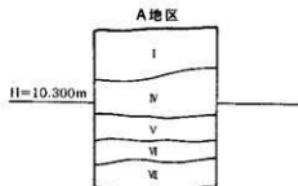
調査地点	所在地	調査面積	遺構	遺物包含層	遺物	平成17年度 近接調査区	備考
13-2	富山市婦中町鶴坂51-42	49m ²	無	無	無	A-1区	
12-7	富山市婦中町鶴坂51-51	64m ²	無	有	土師器 十種	A-2区	
12-8	富山市婦中町鶴坂51-52	64m ²	上坑2基 ピット 焼跡	有	土師器・須恵 器・灰陶陶器・ 土鏡・製塙土 器・石製品	A-2区	
6-7	富山市婦中町鶴坂51-179	64m ²	溝1条 ピット	無	無	C-4区	遺物の出土は無いが、中 世遺物包含層に対応する 層は付帯。
3-1	富山市婦中町鶴坂51-144	4m ²	無	無	無	B-2区	
3-2	富山市婦中町鶴坂51-115	4m ²	無	無	無	B-2区	
3-3	富山市婦中町鶴坂51-116	4m ²	無	無	無	B-2区	
3-13	富山市婦中町鶴坂51-126	4m ²	無	無	無	B-3区	
2-2	富山市婦中町鶴坂51-132	4m ²	無	無	無	B-3区	

4 基本層序

基本層序は平成17年度調査時の基本層序に従う。

A地区

- I層 表土
- IV層 暗灰褐色砂質土
- V層 暗灰褐色土
- VI層 黒褐色粘質土 古代包含層
- VII層 黄灰褐色砂質土 遺構確認面



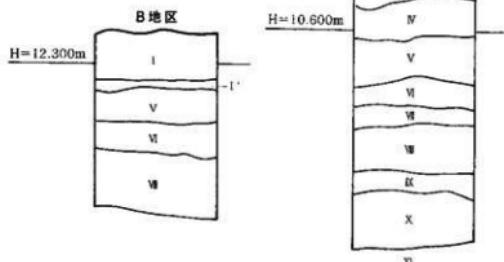
第5図 A地区の基本層序

B地区

- I層 表土
- I'層 表土の酸化層
- V層 暗灰褐色土
- VI層 黑褐色粘質土 中世遺物包含層
- VII層 黄灰褐色砂質土 遺構確認面

C地区

- I層 表土
- I'層 表土の酸化層
- II層 褐色砂質土
- III層 灰褐色砂質土
- IV層 暗灰褐色砂質土
- V層 暗灰褐色土
- VI層 黑褐色粘質土
- VII層 黄灰褐色砂質土
- VIII層 灰褐色砂質土
- IX層 灰褐色土
- X層 黑褐色粘質土 古墳時代包含層
- XI層 黄灰色砂層 遺構確認面



第6図 B・C地区的基本層序

5 各地点の概要

今回調査した各地点は9地点に及ぶが、この内の13-2・3-1・3-2・3-3・3-13の6地点では遺物包含層及び遺構が無く、12-7・12-8・6-7地点において遺物包含層が確認されている。遺物包含層が確認された3地点の内、6-7地点は造成による削平が遺物包含層に影響を与えないため本調査対象外となり、影響のある12-7及び12-8地点に関しては本調査を実施し、この内の12-7地点は遺物が少量出土しただけで、12-8地点は多量の遺物とともに遺構が検出されている。12-8地点以外の6地点については本項に概要を記すだけとし、12-8・12-7・6-7地点の詳細については次章に記述する。

13-2地点 (第7図 図版1-1)

遺跡北東部、平成17年度調査A-1地区の北側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約1mの深さまで盛土となり、盛土下にA地区基本層序のV層暗灰褐色土、VII層黄灰褐色砂質土の順序で堆積しており、古代包含層に相当するVI層黒褐色粘質土が消失している。

12-7地点 (第7図 図版1-2)

遺跡北東部、平成17年度調査A-2地区の北側に位置する。調査の結果、遺物包含層が検出されているが、遺物は少量で、遺構は無い。上層の堆積は現地表面より約1.2mの深さまで盛土となり、盛土下はA地区基本層序のV層暗灰褐色土上面まで削平を受けているが、僅かであるがI層表土及びIV層暗灰褐色砂質土が部分的に残存し、V層以下は古代包含層であるVI層黒褐色粘質土、遺構確認面であるVII層黄灰褐色砂質土の順序で堆積している。遺構確認面であるVIII層は北東方向にやや傾斜しており、本地点の東方に埋没谷が存在することを予想させる。

12-8地点 (第7図 図版2-3)

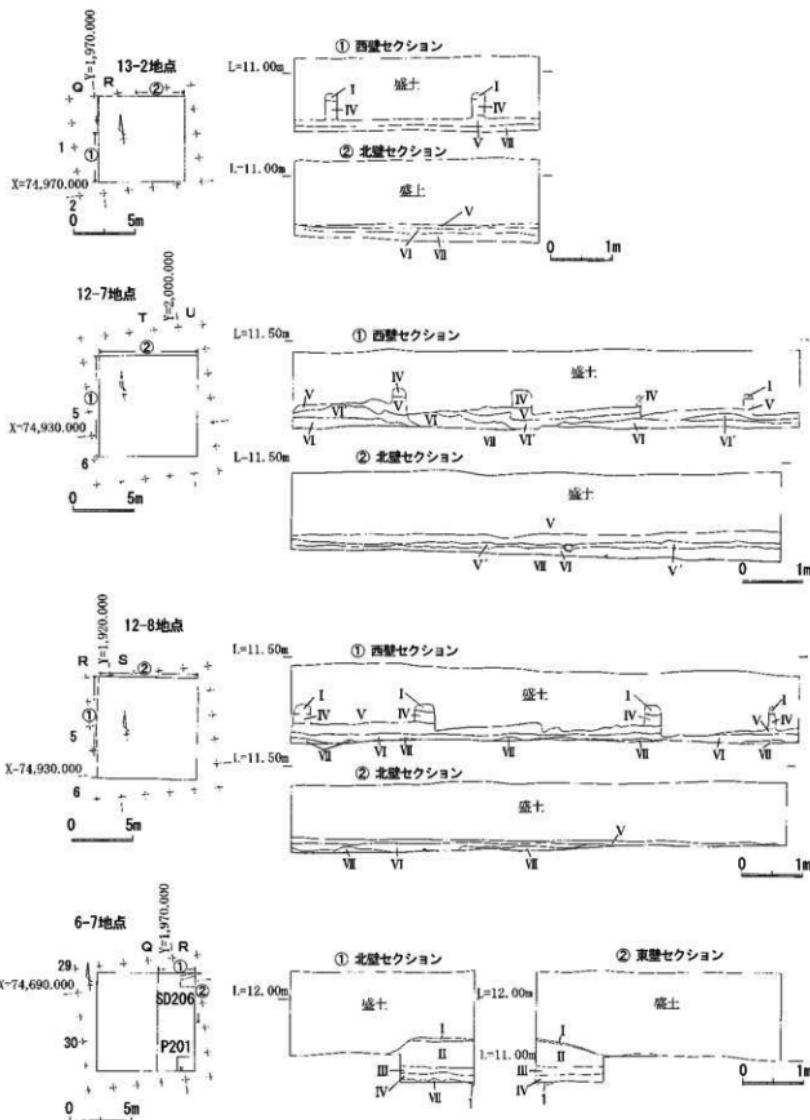
遺跡北東部、平成17年度調査A-2地区の北側に位置する。調査の結果、遺物包含層が検出され、多量の遺物と遺構が検出されている。土層の堆積は現地表面より約1.2mの深さまで盛土となり、盛土下はA地区基本層序のV層暗灰褐色土上面まで削平を受けているが、僅かであるがI層表土及びIV層暗灰褐色砂質土が部分的に残存し、V層以下は古代包含層であるVI層黒褐色粘質土、遺構確認面であるVII層黄灰褐色砂質土の順序で堆積している。

6-7地点 (第7図 図版1-3)

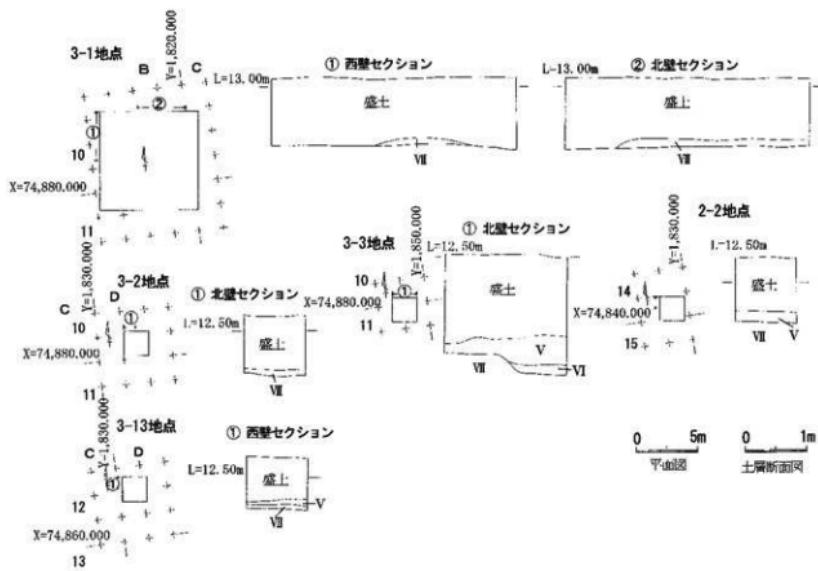
遺跡東南部、平成17年度調査C-4地区の北側に位置する。調査の結果、遺物の出土は無いが中世の遺物包含層に相当するC区基本層序のVI層黒褐色粘質土と遺構が検出されている。本調査は宅地造成に伴う削平が遺物包含層への影響が及ばないため実施しなかったが、遺物包含層の層厚等を確認するため一部を掘り下げ、遺構確認面となるVII層黄色砂層より溝とピットが検出する。土層の堆積は現地表面より約0.75~1.0mの深さまで盛土となり、盛土下はC地区基本層序のI層表土層、II層褐色砂質土、III層暗灰褐色砂質土、IV層暗灰褐色砂質土、中世に形成されたと推測されるVI層黒褐色粘質土、遺構確認面であるVII層黄灰褐色砂質土の順序で堆積している。

3-1地点 (第8図 図版1-4)

遺跡西部、平成17年度調査B-2地区の南側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約0.9mの深さまで盛土となり、盛土下にB地区基本層序のVII層黄灰褐色砂質土となる。



第7図 13-2・12-7・12-8・6-7地点の平面と層序



第8図 3-1・3-2・3-3・3-13・2-2地点の平面と層序

3-2地点 (第8図 図版1-5)

遺跡西部、平成17年度調査B-2地区の南側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約1.2mの深さまで盛土となり、盛土下にB地区基本層序のVII層黄灰褐色砂質土となる。

3-3地点 (第8図 図版1-6)

遺跡西部、平成17年度調査B-2地区の南側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約1.1mの深さまで盛土となり、盛土下にB地区基本層序のVII層黄灰褐色砂質土となる。

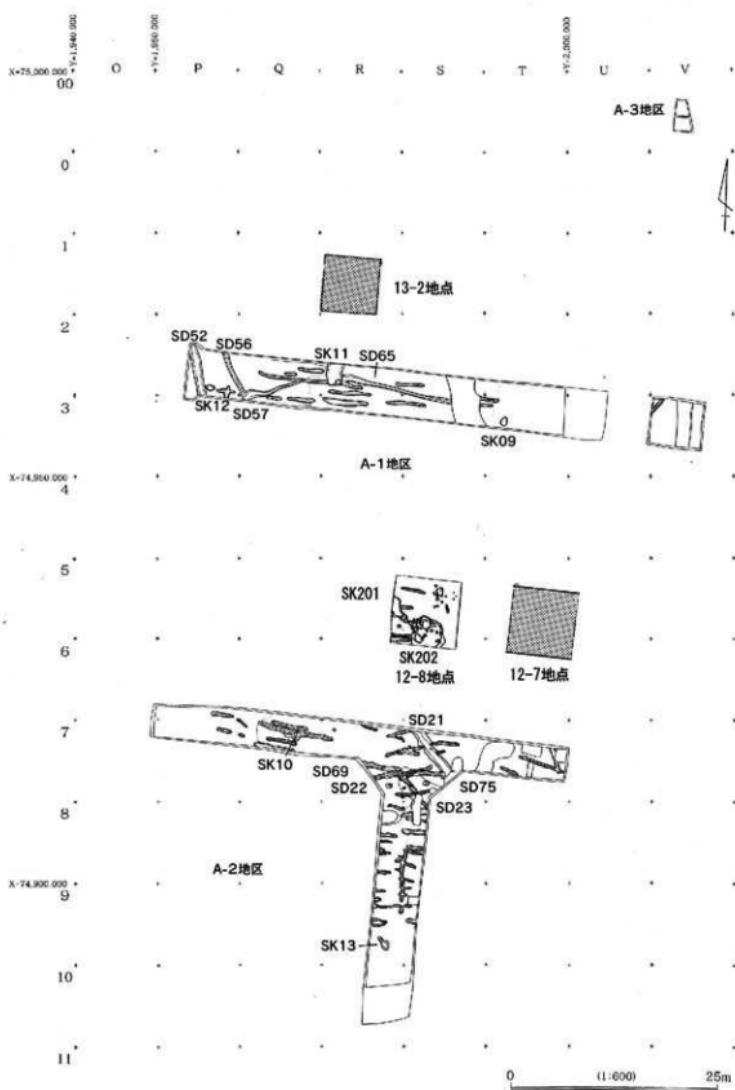
3-13地点 (第8図 図版1-7)

遺跡西部、平成17年度調査B-3地区の北側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約1.1mの深さまで盛土となり、盛土下にB地区基本層序のVII層黄灰褐色砂質土となる。

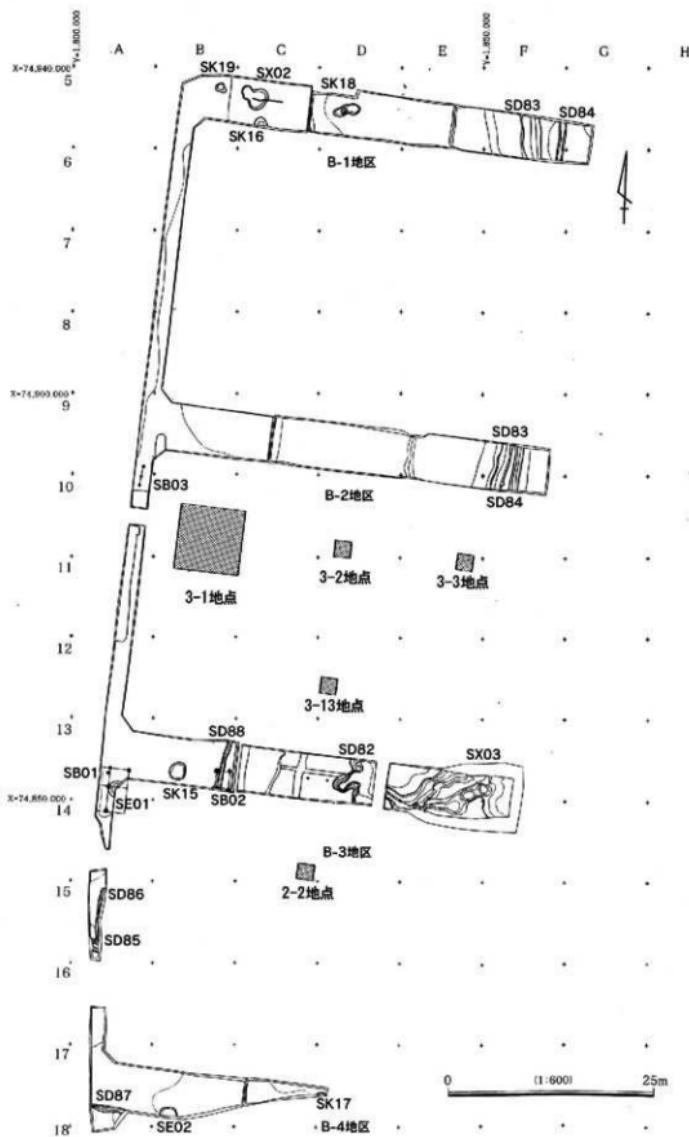
2-2地点 (第8図 図版1-8)

遺跡西部、平成17年度調査B-3地区の南側に位置する。調査の結果、遺構・遺物は検出されていない。土層の堆積は現地表面より約0.9mの深さまで盛土となり、盛土下にB地区基本層序のVII層黄灰褐色砂質土となる。

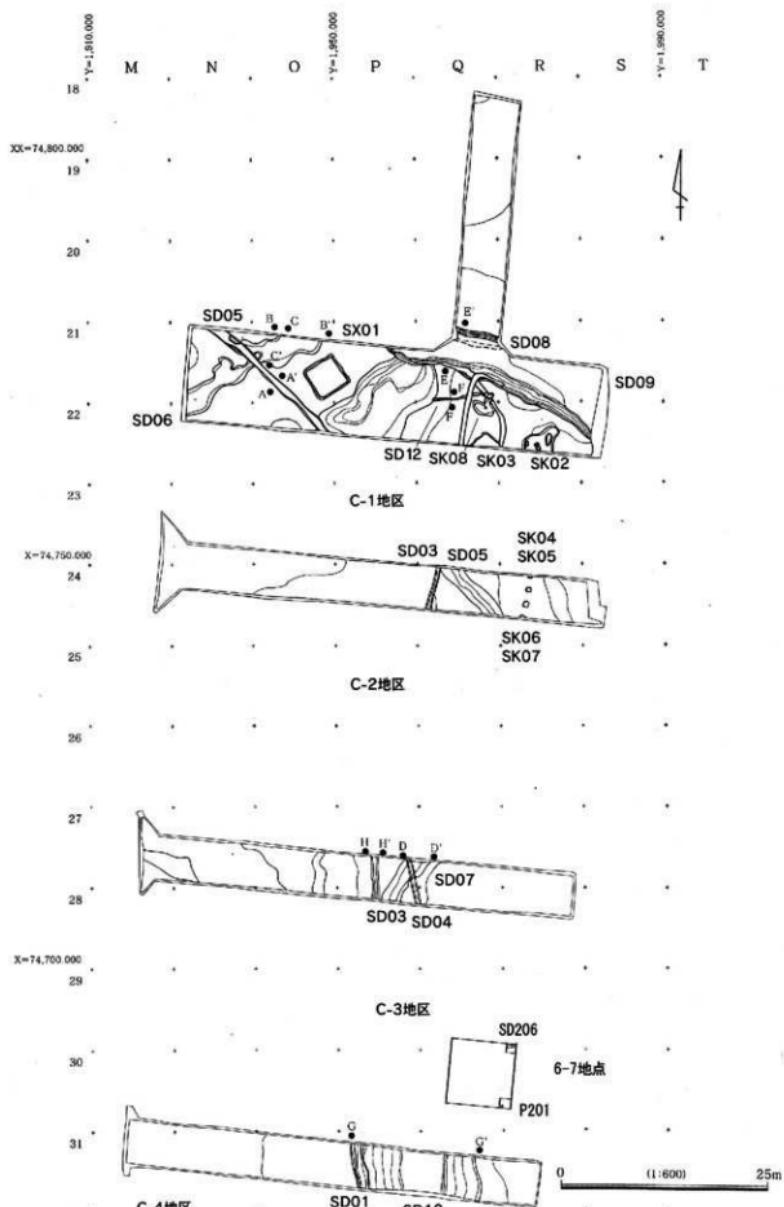
(藤田登)



第9図 平成17年度調査A地区と13-2・12-7・12-8地点



第10図 平成17年度調査B地区と3-1・3-2・3-3・3-13・2-2地点



第11図 平成17年度調査C地区と6-7地点

IV 遺構・遺物

1 概要

今回の調査では、12-8・12-7・6-7の3地点で遺構・遺物が検出されている。12-8地点は平成17年度調査のA-2地区に隣接し、古代の遺物と土坑・溝が検出されている。12-7地点は平成17年度調査のA-2区に隣接し、古代の遺物が少量出土しただけである。6-7地点は平成17年度調査のC-4区に隣接し、中世と思われる溝とピットが確認されている。

2 12-7地点

遺物は土師器・土錐が出土し、遺構は検出されていない。

遺物（第12図 図版4）

1はロクロ土師器の有台壺である。柱状高台で、底部は右回転糸切りである。2～4は土錐である。2は孔部の両端の出入り口部周辺が孔部に直交する面を成し、3・4には面がみられない。

3 12-8地点

検出された遺構は古代の土坑2基・畑跡が存在し、遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・土錐・製塙土器が出土している。

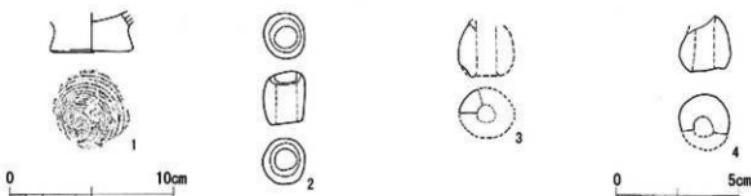
土坑

SK201（第14～17図 図版3-2・3）

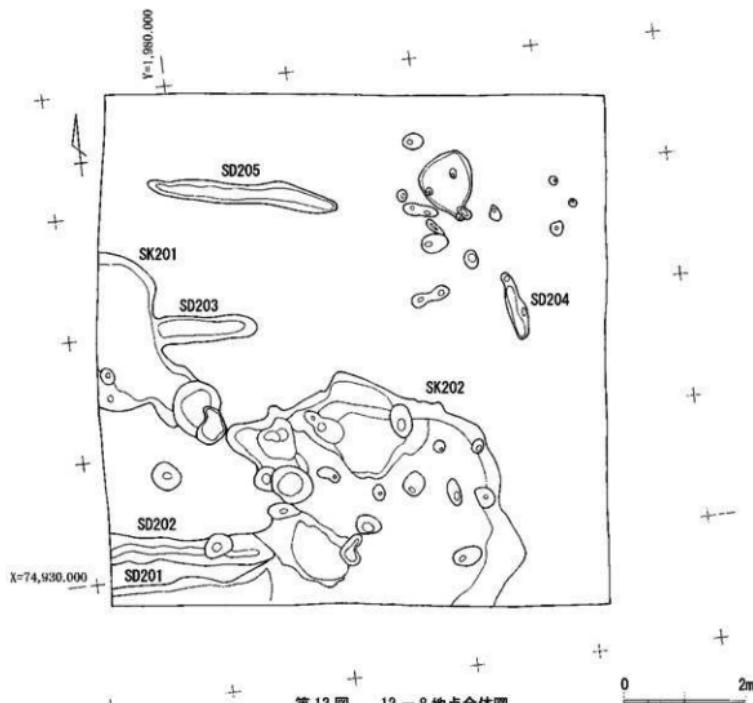
調査区の西端に位置する。畑跡を切る。形状は長軸長350cm以上×短軸長250cm以上の不整形を呈し、深さは最深部で38cmを測り、底面は凹凸が激しい。遺物は覆土中より土錐と土師器片が出土し、その内の土錐は集中して出土しており、一網分の可能性が考えられる出土状況である。

SK202（第14～16・18～22図 図版2-2、3-1）

調査区の南部に位置する。畑跡を切る。形状は長軸長520cm以上×短軸長490cm以上の不整形を呈し、深さは30cm前後で、底面は凹凸が激しく、ピットが多数存在する。壁は傾斜して立ち上がる。覆土を見ると、複雑な堆積状況が認められ、ここでは一応一基として取り扱っているものの数基の遺構が重複していると考えられる。遺物は覆土中より土錐・須恵器・土師器・石製品・自然礫が多量に出土している。土錐の出土状況を見ると集中が大きく2群にわかれ、土錐集中範囲の外側に石器・自然礫が多い傾向がみられる。



第12図 12-7地点出土遺物



烟跡

SD201～203・205 (第14・23図 図版3-4)

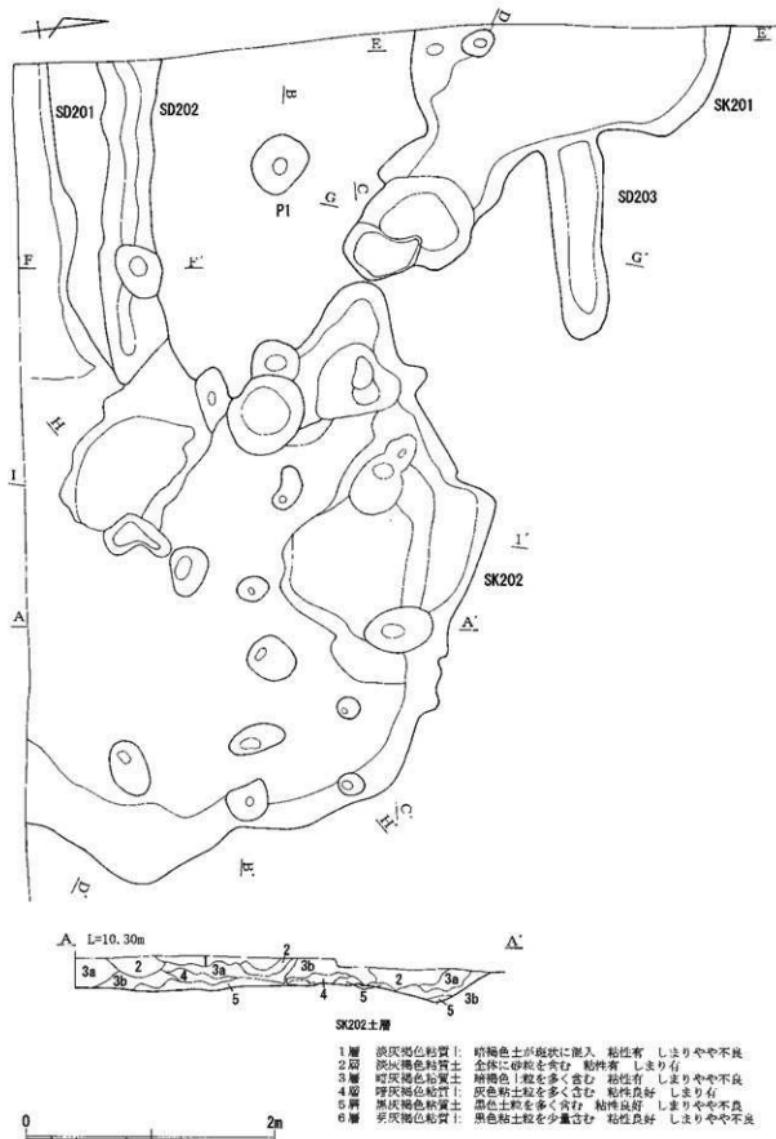
調査区の西半部に歓溝状遺構と推測されるSD201～203・205が検出されている。SD201～203・205は長軸方向をN75°～95°Wとし、覆土は灰褐色土で、ひとつのまとまりとして捉えることができる。SD201・202はSK202に、SD203はSK201に切られており、烟址はSK201・202以前と考えられる。煙サクの断面形状は幅30～45cm×深さ4～20cmの「U」字形を呈している。底面は凹凸が比較的少ない。遺物は出土していない。SD204 (第23図 図版3-5)

調査区の東北部より検出されている。歓溝状遺構の一部と思われる。長軸方向をN12°Wとし、断面形状は幅30cm×深さ5cmの皿状形を呈している。覆土は黒褐色土で、SD201～203・205とは異なり、時期差があるものと推測される。底面は凹凸が激しい。遺物は出土していない。

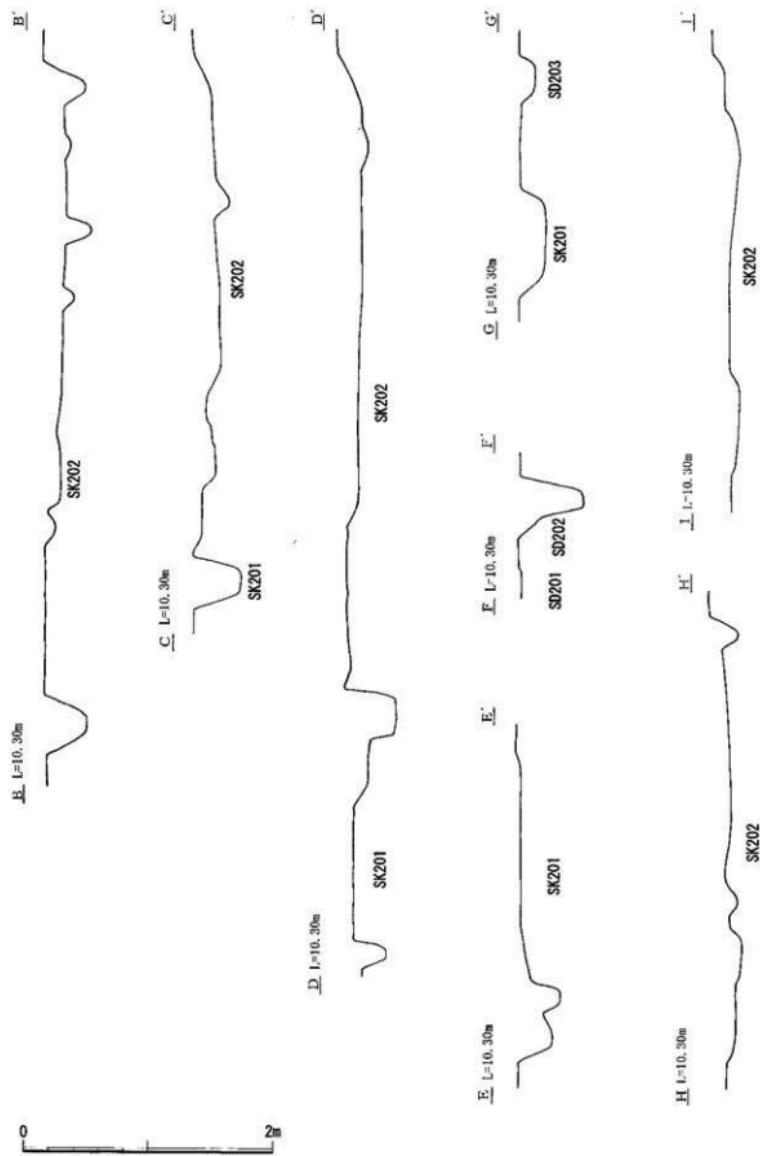
遺物

SK201 (第17図 図版4)

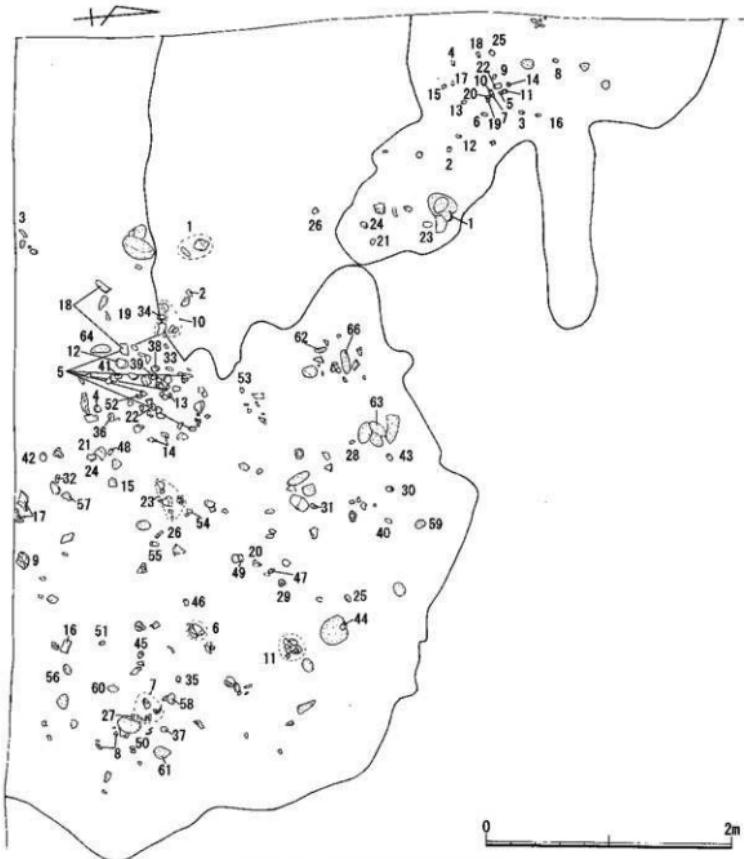
1はクロコ土器器の無台椀である。口縁部が僅かに外反し、底部は右回転糸切りである。2～27は土錐である。1～20は孔部径が6mm前後、重量が30g以下の樽あるいは卵型 (細辻真澄 2001・2004) を呈す土錐で、16～18は孔部下端が孔部に対して直交する面を有し、19・20は孔部両端に面を有している。21～27は孔部径が1.7mm前後、重量が約40～80gの卵から棒型を呈す土錐で、25～27には孔部両端の入り口に孔部に直交する面が見られる。



第14図 SK201・202、SD201～03 平面図



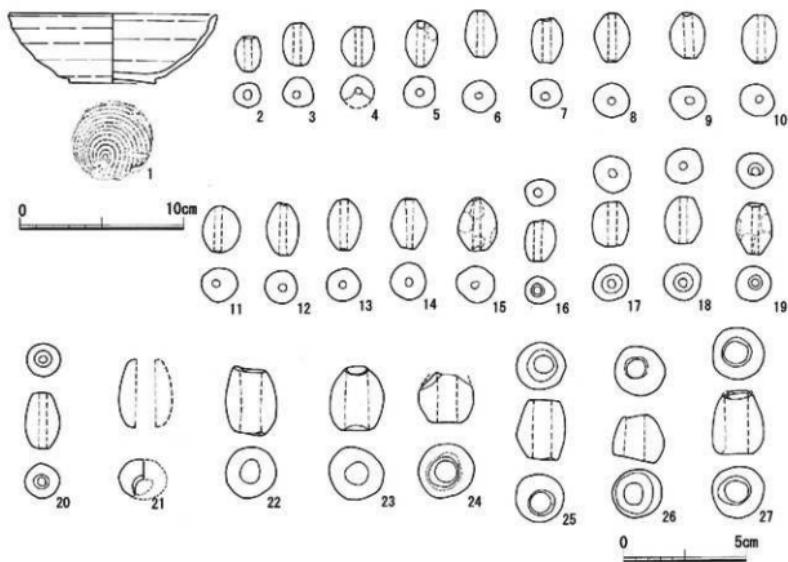
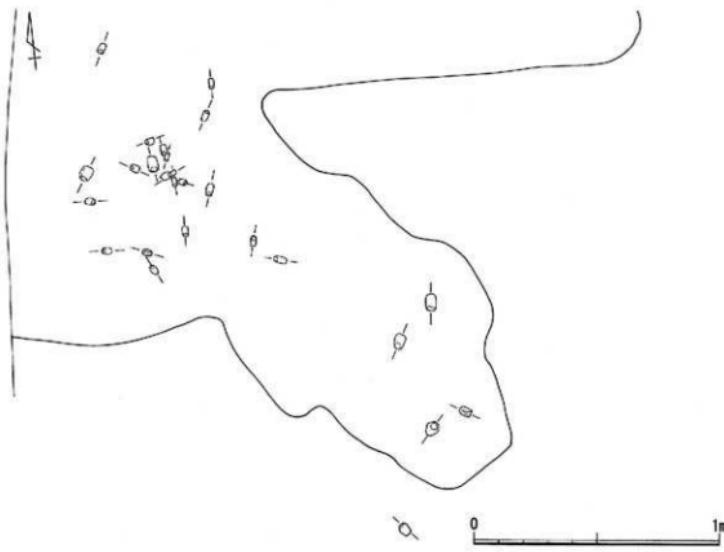
第15図 SK201・202、SD201～203 断面図



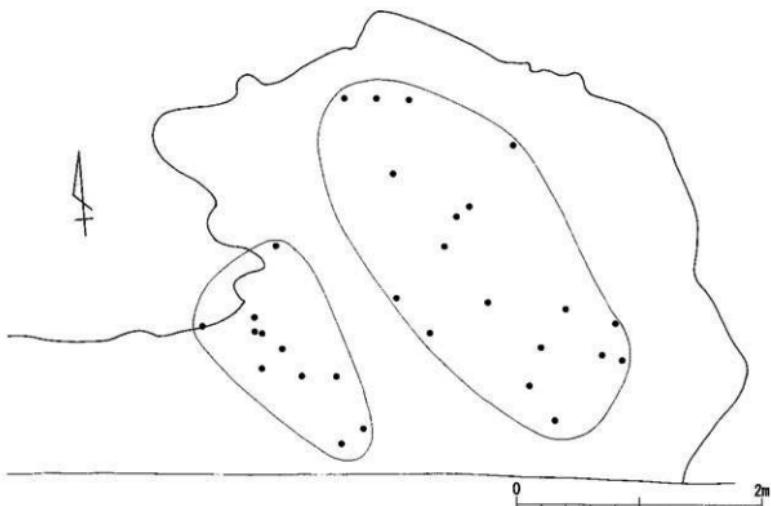
第16図 SK201・202 遺物出土状況

SK202 (第19~22図 図版4~6)

1~9はロクロ土師器無台椀である。1~4は口縁部が内湾気味に立ち上がり、5~9は口縁部が外反する。9の体部外面に黒色付着物がある。10はロクロ土師器椀で、口縁部が外反する。11はロクロ土師器の無台椀で、内外面全面に赤彩痕がみられる。12・13はロクロ土師器無台椀で、12は内面が黒色処理を施され、13はやや高めの高台である。14・15はロクロ土師器小型甕である。14は口縁部が受け口状となり、外面に煤が付着する。15はかなり小さな甕で、底部は糸切りである。16~18は土師器甕で、口縁部は内側に折り返し丸く肥厚させる。19は須恵器双耳瓶の口縁部片で、口縁部の断面が三角形となる。20は須恵器双耳瓶の肩部片で、隆帶は台形断面となる。21は須恵器甕の胴部片で、外面叩き、内面当て目となる。22~25は製塙土器片である。22は口縁部片、23・24は胴部片、25は底部片で、全体の判明する資料は無いが平底型（戸潤幹夫 1983）を呈していたと推測される。26~56は



第 17 図 SK201 土錠出土状況及び出土遺物



第18図 SK202 土錐出土分布状況

土錐である。26は細身の棒状を呈し、重量が10g以下である。27・28は俵型を呈し、重量が10~30gのやや小型で、28は孔部両端が面取り状となる。29~56は俵型を呈し、重量が40g以上となり、33~44は孔部の片端が面取り状と、45~49は孔部の両端が面取り状となる。57は砥石で、破碎繰の繰被面側に砥面が見られ、砥面は多角形状となる。58は磨石で、扁平な自然縫の片面に磨痕が、側面の3/4に敲打痕がみられる。59は磨石で、円盤状の自然縫の2面に磨痕が存在する。60は敲石で、円盤状の自然縫の側面3/4に敲打痕がみられる。61は磨石で、扁平な自然縫の2面に磨痕がみられる。62は磨石で、扁平な自然縫の片面に磨痕が、側面の2ヶ所に敲打痕がみられる。63は磨石で、扁平な自然縫の片面に磨痕が、側面端部に敲打痕がみられる。64は磨石で、棒状の自然縫の3面に磨痕がみられる。65は敲石で、棒状の自然縫の端面に敲打痕がみられる。66は砥石で、棒状の自然縫の3面に砥面が、側面3ヶ所に敲打痕がみられる。

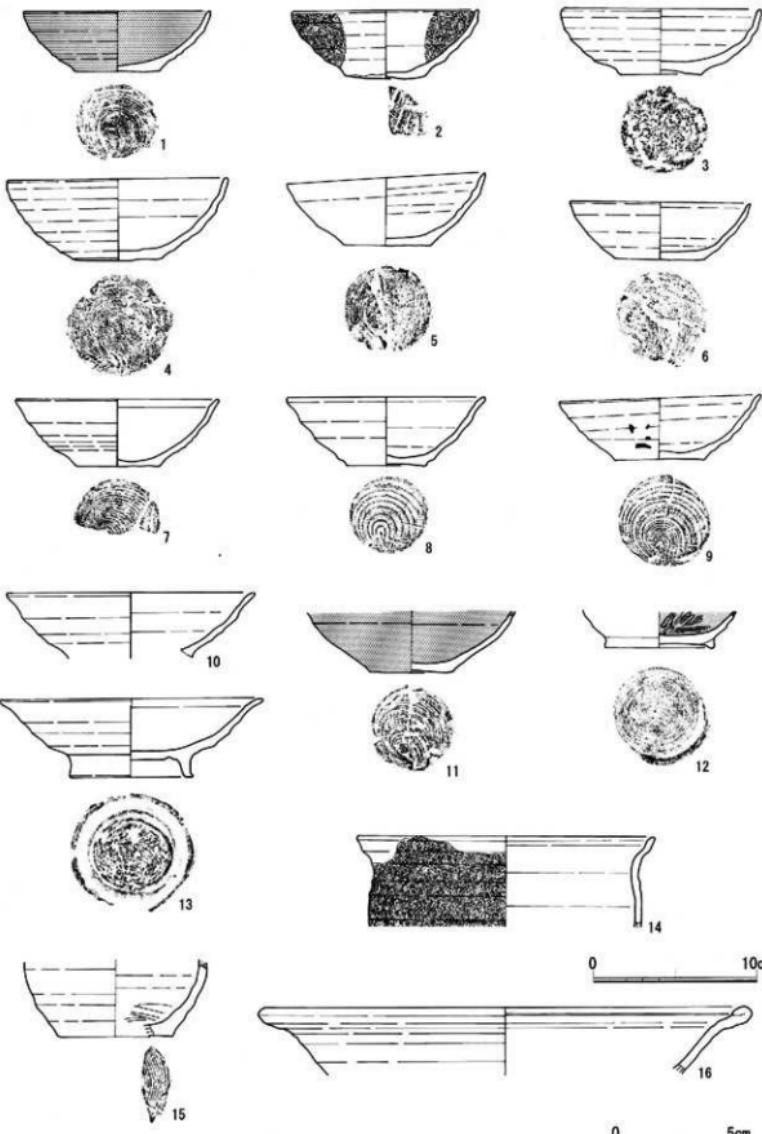
SD05 (第23図 図版4)

1は土錐で、俵型を呈し、孔部片端に面が見られる。

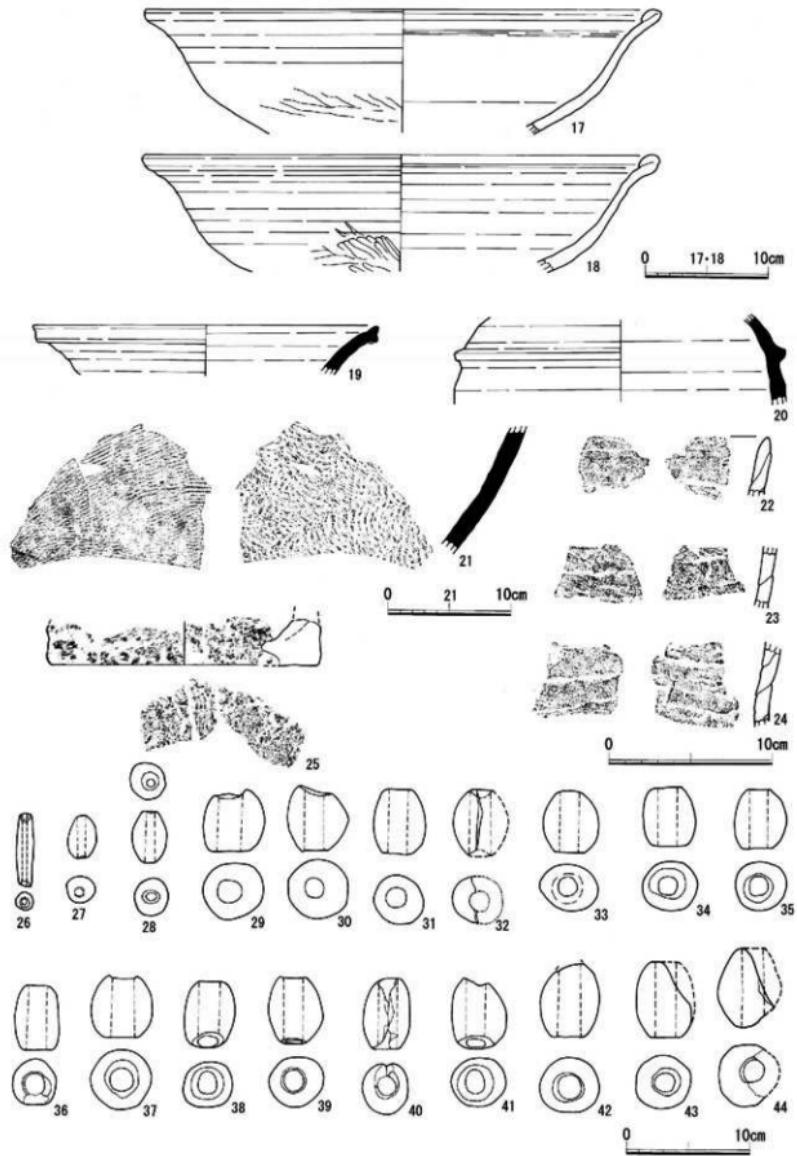
包含層出土遺物 (第24図 図版6)

包含層より須恵器・土師器・製塙土器・土錐が出土しているが、SK201或いはSK202のいずれかに伴うものと思われる。

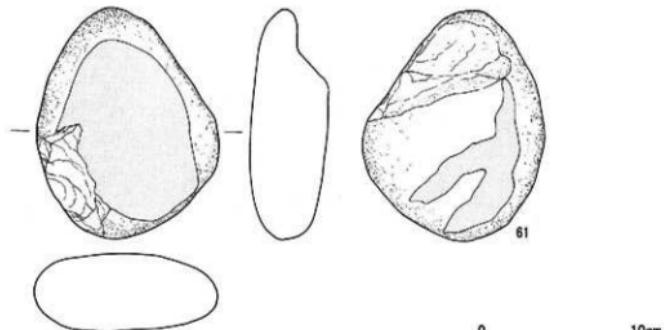
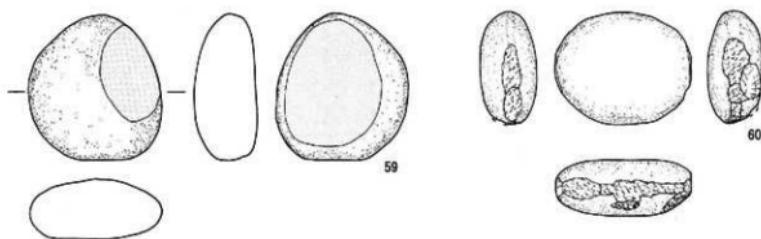
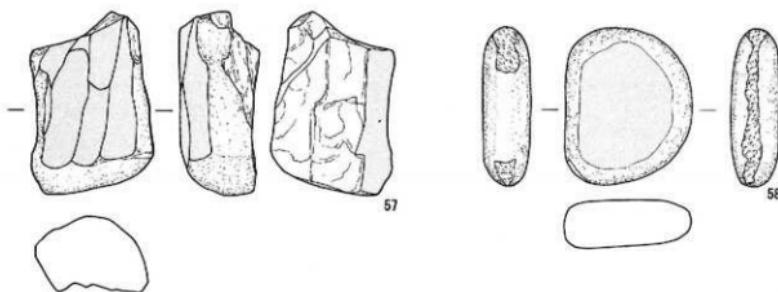
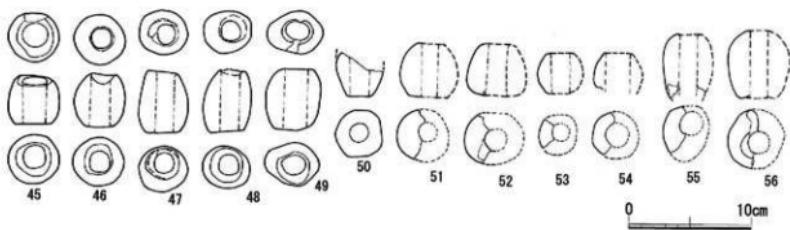
1はロクロ土師器の無台碗で、内面は黒色処理が施され、外面は煤が付着する。2はロクロ土師器の有台皿で、やや高い高台を有している。3は須恵器瓶類の蓋である。外面天状部中央が手持ちヘラケズリとなる。4は須恵器甕の肩部片で、外面が叩き、内面が當て目となる。5は灰釉陶器の碗で、やや厚めの釉を浸け掛けしている。6・7は須恵器三筋壺である。6は肩部片で、隆帯の断面は台形を呈する。7は肩~頸部片と胴下部の破片で、接合はできないが同一個体と推測される。隆帯の断面は三角形を呈している。8~14は製塙土器である。8・9が口縁部片、10~13が胴部片で、10の内面にはハケ目が認められる。14は胴部片で、上下両端が接合面より剥落している。15~20は土錐である。いずれも小片であるが、重量が40g以上の俵型を呈していたと推測される。



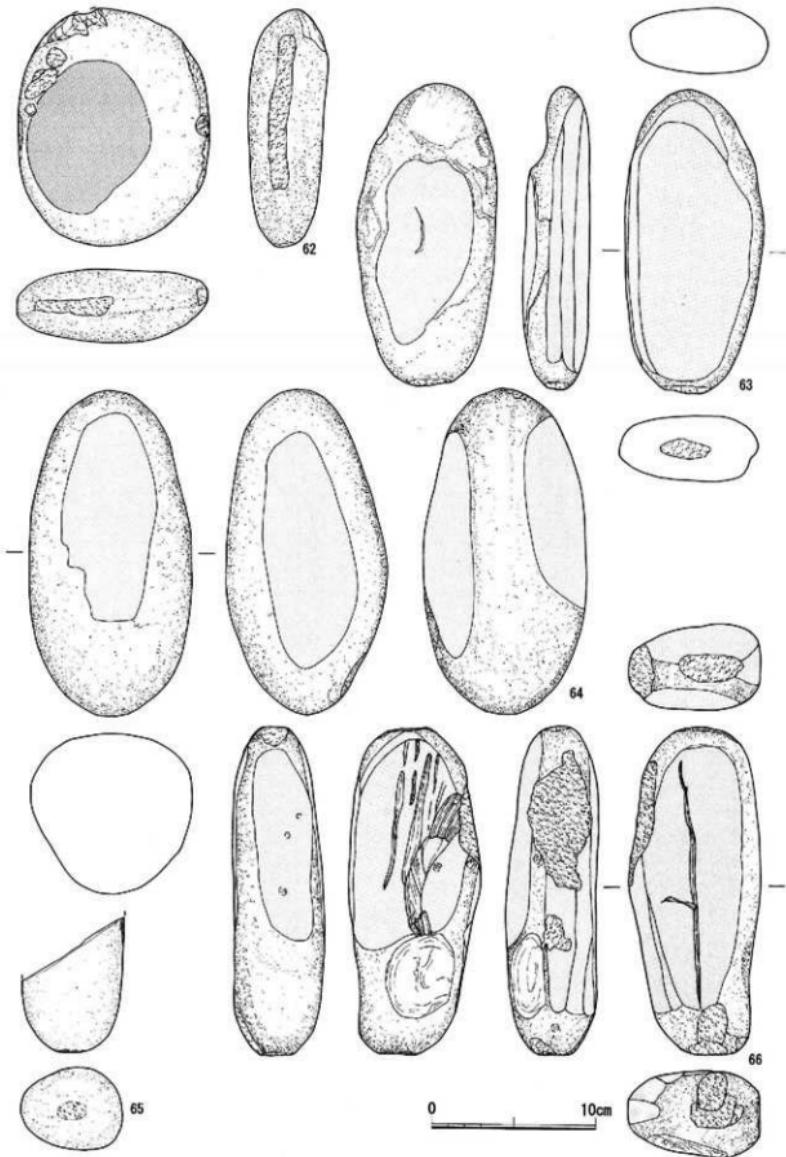
第19図 SK202出土遺物(1)



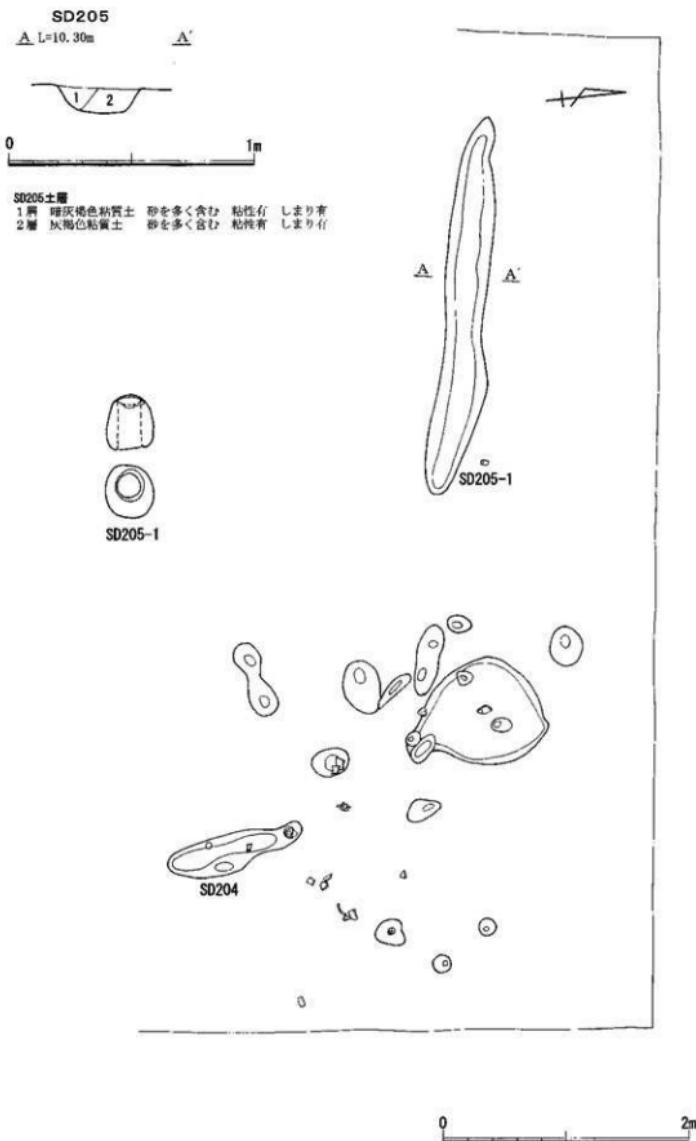
第20図 SK202出土遺物(2)



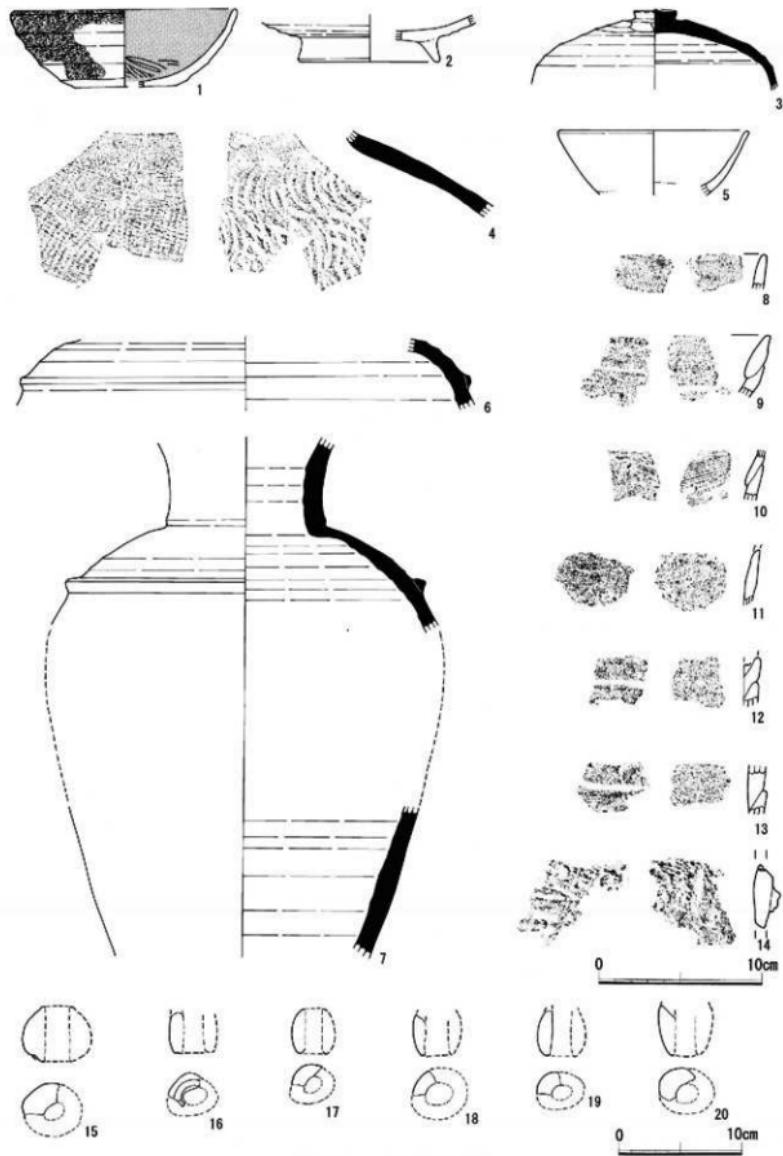
第21図 SK202出土遺物(3)



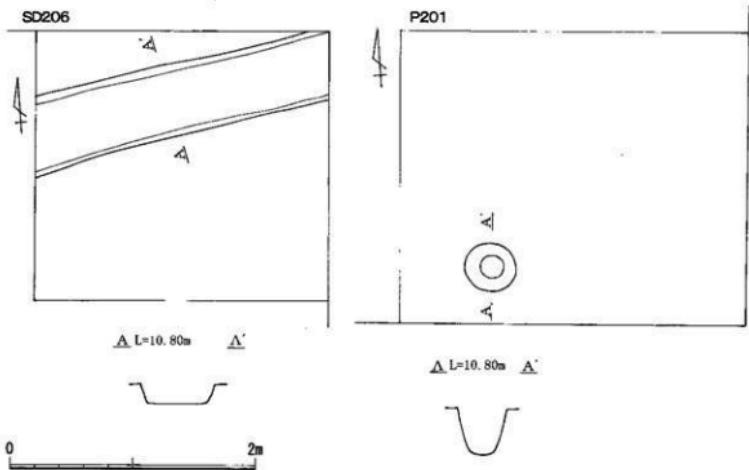
第22図 SK202出土遺物(4)



第23図 SD204・205、SD205 出土遺物



第24图 包含层出土遗物



第25図 SD206・P201

4 6-7地点

6-7地点は本調査対象とはならなかつたが、層位確認で調査区の一部を深掘りしたところ溝1条とピット1基が検出されている。遺物は出土していない。

SD206 (第25図)

調査区の北西部に位置し、ほぼ東西方向を直線的に走向する。東西両端は調査区外に延びる。断面形状は幅30cm×深さ8cmの逆台形状を呈する。遺物は出土していないが、近隣に位置する平成17年度発掘のC-4区の調査成果に照合すると層位的に中世段階と考えられる。

P201 (第25図)

調査区の南西部に位置する。径20cmの円形を呈し、断面形状は深さ20cmの逆台形状を呈する。遺物は出土していないが、近隣に位置する平成17年度発掘のC-4区の調査成果に照合すると層位的に中世段階と考えられる。

(折原)

5 遺物観察表

第3表 12-7地点遺物観察表

番号	器種 種別	法 量	cm	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土製品 有柄碗	口一底4.6	高一	①砂粒②赤褐色③酸化	右回転系切り。
2	土製品 土瓶	径3.4	長さ4.4 孔径1.7 重さ37.36g	①砂粒②赤褐色③酸化	巻きつけ。孔縫両端が面取り状となる。樽型。
3	土製品 土瓶	径一	長さ(4.2) 孔径一 重さ(12.18g)	①砂粒②暗灰褐色③酸化	巻きつけ。樽型。
4	土製品 土瓶	径一	長さ(4.4) 孔径一 重さ(38.22g)	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。樽型。

第4表 SK201 遺物観察表

番号	器種 種別	法 量 cm	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土器器 無台輪	口 12.5 底 5.3 高 5.0	①砂粒②灰褐色③酸化	右回転糸切り。、
2	土製品 土鍋	径2.1 長さ2.8 孔径0.65 重さ10.67g	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
3	土製品 土鍋	径2.6 長さ3.75 孔径0.6 重さ20.01g	①砂粒②に赤い赤褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
4	土製品 土鍋	径(2.20) 長さ(2.65) 孔径0.6 重さ(12.49g)	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
5	土製品 土鍋	径2.6 貫さ3.7 孔径0.6 重さ19.09g	①砂粒②橙褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
6	土製品 土鍋	径2.6 貫さ3.75 孔径0.6 重さ20.01g	①砂粒②淡褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
7	土製品 土鍋	径2.5 長さ3.65 孔径0.7 重さ16.94g	①砂粒②橙褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
8	土製品 土鍋	径2.8 長さ3.9 孔径0.6 重さ24.79g	①砂粒②橙褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
9	土製品 土鍋	径2.7 長さ3.7 孔径0.75 重さ22.32g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
10	土製品 土鍋	径2.8 長さ3.85 孔径0.6 重さ23.21g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。卵型。
11	土製品 土鍋	径3.0 長さ3.75 孔径0.6 重さ27.10g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。卵型。
12	土製品 土鍋	径2.55 長さ4.2 孔径0.65 重さ23.06g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
13	土製品 土鍋	径2.7 長さ4.1 孔径0.6 重さ24.45g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。卵型。
14	土製品 土鍋	径2.9 長さ4.1 孔径0.7 重さ26.82g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。樽型。
15	土製品 土鍋	径3.1 長さ4.25 孔径0.6 重さ29.66g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。卵型。
16	土製品 土鍋	径2.4 長さ3.3 孔径0.6 重さ15.12g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。孔部片端に面取り。卵型。
17	土製品 土鍋	径2.95 長さ3.6 孔径0.7 重さ28.01g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。孔部片端に面取り。卵型。
18	土製品 土鍋	径2.95 長さ3.75 孔径0.7 重さ28.00g	①砂粒②棕褐色③酸化	巻きつけ。孔部片端に面取り。卵型。
19	土製品 土鍋	径2.9 長さ4.2 孔径0.6 重さ28.00g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。孔部両端に面取り。樽型。
20	土製品 土鍋	径2.75 長さ4.5 孔径0.7 重さ28.20g	①砂粒②淡赤橙色③酸化	巻きつけ。孔部両端に面取り。樽型。
21	土製品 土鍋	径一 長さ5.5 孔径一 重さ(25.41)g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部両端に面取り。卵型。
22	土製品 土鍋	径1.1 長さ5.6 孔径1.75 重さ76.42g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。樽型。
23	土製品 土鍋	径4.35 長さ5.25 孔径1.8 重さ84.70g	①砂粒②明褐色③酸化	巻きつけ。樽型。
24	土製品 土鍋	径(4.1) 長さ4.5 孔径1.8 重さ(64.71)g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。樽型。
25	土製品 土鍋	径3.85 長さ4.8 孔径1.6 重さ81.34g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。樽型。
26	土製品 土鍋	径4.1 長さ4.1 孔径1.6 重さ40.61g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。樽型。
27	土製品 土鍋	径4.2 長さ5.1 孔径1.8 重さ64.86g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。樽型。

第5表 SK202 遺物観察表 (1)

番号	器種 種別	法 量 cm	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土器器 無台輪	口 (11.2) 底 5.0 高 3.8	①砂粒②淡赤橙色③酸化	右回転糸切り。 内外面に赤彩
2	土器器 無台輪	口 (12.2) 底 (5.0) 高 4.2	①骨針・砂粒②淡赤橙色③酸化	右回転糸切り。 内外面に煤
3	土器器 無台輪	口 (12.0) 底 5.0 高 4.0	①砂粒②に赤い赤褐色③酸化	右回転糸切り。

第6表 SK202遺物觀察表(2)

番号	器種 種別	法 量	cm	①船上②色調③焼成 度	成・整形の特徴	
4	土師器 無台輪	口 (13.2)	底 5.4 高 5.0	①砂粒②にぶい赤橙色③酸化	右回転糸切り。	
5	土師器 無台輪	口 (12.0)	底 5.4 高 4.5	①砂粒②灰白色③酸化	右回転糸切り。	底面に塗
6	土師器 無台輪	口 (11.0)	底 5.4 高 3.5	①砂粒②灰白色③酸化	右回転糸切り。	
7	土師器 無台輪	口 (12.2)	底 (5.0) 高 4.1	①骨針・砂粒②赤橙色③酸化	右回転糸切り。	
8	土師器 無台輪	口 (12.0)	底 4.8 高 4.2	①骨針・砂粒②淡赤橙色③酸化	右回転糸切り。	
9	土師器 無台輪	口 (12.2)	底 5.4 高 4.0	①骨針・砂粒②淡赤褐色③酸化	右回転糸切り。	体部外面上に黒色付着物
10	土師器 輪	口 (15.0)	底 - 高 -	①砂粒②赤褐色③酸化	ロクロ調整。	
11	土師器 無台輪 (3.7)	口 -	底 5.0 高 -	①砂粒②赤褐色③酸化	右回転糸切り。	外面に赤彩
12	土師器 有台輪 (3.8)	口 -	底 5.0 高 -	①砂粒②浅赤褐色③酸化	右回転糸切り。内面ミガキ	内面黒色処理
13	土師器 有台輪	口 (16.0)	底 4.8 高 7.6	①砂粒②浅黄色③酸化	右回転ロクロ、回転糸切り。	
14	土師器 小盤	口 (18.0)	底 - 高 -	①砂粒②根褐色③酸化	ロクロ調整。	外面に塗
15	土師器 小盤	口 -	底 7.0 高 -	①骨針・砂粒②にぶい黄褐色③酸化	ロクロ調整。回転糸切り。内面底部下端へラナデ。	
16	土師器 盤	口 (40.0)	底 - 高 -	①砂粒②にぶい赤橙色③酸化	ロクロ調整。	
17	土師器 盤	口 (42.0)	底 - 高 -	①根・砂粒②淡赤褐色③酸化	ロクロ調整。外表面下半ケズリ。	
18	土師器 鍋	口 (42.0)	底 - 高 -	①根・骨針②明褐色③酸化	ロクロ調整。外表面下半ケズリ。	
19	須恵器 甕	口 (11.0)	底 - 高 -	①砂粒②墨灰色③還元	ロクロ調整。	
20	須恵器 筋壺	口 -	底 - 高 -	①砂粒②墨灰色③還元	ロクロ調整。	
21	須恵器 甕	口 -	底 - 高 -	①黑色粒・白色粒②灰色③還元	ロクロ調整。	
22	製陶土器 鉢	口 -	底 - 高 -	①砂粒②小橙色③酸化	粘土紐接合痕。	
23	製陶土器 鉢	口 -	底 - 高 -	①砂粒②赤褐色③酸化	粘土紐接合痕。	
24	製陶土器 鉢	口 -	底 - 高 -	①砂粒②赤褐色③酸化	粘土紐接合痕。	
25	製陶土器 鉢	口 -	底 - 高 -	①砂粒②灰褐色③酸化	粘土紐接合痕。	
26	土製品 土鍋	長さ 5.8 重量 7.89	径 1.4 孔径 0.45	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。寸胴型。	
27	土製品 土鍋	長さ 5.8 重量 15.92	径 1.4 孔径 0.70	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。樽型。	
28	土製品 土鍋	長さ 4.3 重量 29.92	径 2.8 孔径 0.60	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。丸部両端面取り。樽型。	
29	土製品 土鍋	長さ 5.0 重量 84.59	径 5.0 孔径 2.0	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。樽型。	
30	土製品 土鍋	長さ 5.3 重量 83.39	径 4.9 孔径 1.6	①砂粒・輕石②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。樽型。	
31	土製品 土鍋	長さ 5.4 重量 61.21	径 4.2 孔径 1.7	①砂粒・輕石②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。樽型。	
32	土製品 土鍋	長さ -	径 - 孔径 -	①砂粒・輕石②灰褐色③酸化	巻きつけ。樽型。	
33	土製品 土鍋	長さ 5.0 重量	径 4.6 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。樽型。	
34	土製品 土鍋	長さ 4.9 重量 68.67	径 4.3 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。樽型。	

第7表 SK202遺物観察表(3)

番号	器種 種別	法 量	cm	①粘土②色調③焼成	成・整形の特徴	
35	土製品 土錐	長さ 4.9 重量 69.5g	径 4.2 孔径 1.5	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
36	土製品 土錐	長さ 5.4 重量 -	径 3.6 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
37	土製品 土錐	長さ 5.0 重量 90.65g	径 5.0 孔径 1.9	①砂粒②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
38	土製品 土錐	長さ 5.2 重量 58.20g	径 3.9 孔径 1.7	①砂粒・鉆石②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
39	土製品 土錐	長さ 5.4 重量 80.04g	径 4.4 孔径 1.7	①砂粒・鉆石②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
40	土製品 土錐	長さ 5.8 重量 65.56g	径 3.8 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
41	土製品 土錐	長さ 5.8 重量 77.02g	径 4.5 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
42	土製品 土錐	長さ 5.0 重量 107.63g	径 4.6 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
43	土製品 土錐	長さ 6.2 重量 80.96g	径 4.5 孔径 1.7	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
44	土製品 土錐	長さ 6.4 重量 -	径 5.0 孔径 1.7	①砂粒②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。棒型。	
45	土製品 土錐	長さ 4.1 重量 16.37g	径 4.1 孔径 2.0	①砂粒②明黄褐色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。棒型。	
46	土製品 土錐	長さ 4.4 重量 50.63g	径 4.2 孔径 1.7	①砂粒②灰褐色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。棒型。	
47	土製品 土錐	長さ 5.1 重量 58.06g	径 4.0 孔径 1.6	①砂粒②淡黃褐色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。棒型。	
48	土製品 土錐	長さ 5.2 重量 58.20g	径 3.9 孔径 1.7	①砂粒・鉆石②灰褐色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。棒型。	
49	土製品 土錐	長さ 5.0 重量 54.86g	径 4.5 孔径 2.0	①砂粒・鉆石②淡小褐色③酸化	巻きつけ。孔部両端面取り。棒型。	
50	土製品 土錐	長さ - 重量 -	径 - 孔径 1.6	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。棒型。	
51	土製品 土錐	長さ 4.4 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒・鉆石②灰褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	
52	土製品 土錐	長さ 4.2 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒②暗灰褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	
53	土製品 土錐	長さ 3.1 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒②暗灰褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	
54	土製品 土錐	長さ - 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒②暗灰褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	
55	土製品 土錐	長さ - 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	
56	土製品 土錐	長さ 5.5 重量 -	径 - 孔径 -	①砂粒②淡赤褐色③酸化	巻きつけ。棒型。	

第8表 SK202遺物観察表(4)

番号	器種 種別	法 量	cm	特徴	
57	石器 砾石	長さ(11.2) 重量 409.46g	幅 7.5 厚さ 4.7	自然縫の被磨材の一面を砾石として利用している。底面は多角形となる。 波紋岩。	
58	石器 磨石	長さ 9.6 重量 2.9重348.48g	幅 7.7 厚さ	自然縫の半的一面に磨滅度、側面に敲打痕がみられる。	
59	石器 磨石	長さ 8.7 重量 3.7重368.48g	幅 8.0 厚さ	自然縫の半的一面に磨滅度がみられる。	
60	石器 敲打石	長さ 8.3 重量 3.4重277.47g	幅 6.9 厚さ	自然縫の平の側面に敲打痕がみられる。	
61	石器 磨石	長さ 14.0 重量 4.7重327.77g	幅 11.1 厚さ	自然縫の平の面に摩擦痕がみられる。	
62	石器 磨石	長さ 14.5 重量 4.4重1041.17g	幅 11.6 厚さ	自然縫の半の2面に摩滅痕、側面に敲打痕がみられる。	
63	石器 磨石	長さ 18.5 重量 4.0重895.39g	幅 8.4 厚さ	自然縫の平の1面に摩滅痕、側面端部に敲打痕がみられる。	
64	石器 磨石	長さ 19.9 重量 9.8重2449.36g	幅 9.8 厚さ	自然縫の平の3面に摩滅痕がみられる。	
65	石器 敲打石	長さ 19.9 重量 9.8重2449.37g	幅 9.8 厚さ	自然縫の端部に敲打痕がみられる。	
66	石器 砾石	長さ 19.9 重量 9.8重2449.38g	幅 9.8 厚さ	自然縫の3面に摩滅痕、側面と端部に敲打痕がみられる。	

第9表 SD205 遺物観察表

番号	器種 種別	法 量 cm	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土製品 土鉢	径4.1 長さ4.4 孔径2.0 重さ14.15g	①砂粒②灰白色③酸化	巻きつけ。孔部片端面取り。

第10表 包含層出土遺物

番号	器種 種別	法 量 cm	①胎土②色調③焼成	成・整形の特徴
1	土師器 無台碗	口 (13.6) 底 (6.0) 高 4.7	①砂礫②暗褐色③焼成	ロクロ調整。内面見込みにナゲ、体部～口縁部ミガキ。体部下端回転ヘラケズリ、底部ナゲ。
2	土師器 有台碗	口 - 底 (8.5) 高 -	①砂粒②灰白色③焼成	ロクロ調整。
3	須恵器 盤	口 - 底 - 高 -	①砂粒②灰白色③還元	右ロクロ調整。外面天井部手持ちヘラケズリ。
4	須恵器 甌	口 - 底 - 高 -	①砂粒②灰白色③還元	外面叩き目、内面当て目。
5	灰釉陶器 甌	口 11.5 底 - 高 -	①砂粒②灰白色③還元	ロクロ調整。受け掛け。
6	須恵器 三筋盤	口 - 底 - 高 -	①砂粒②灰褐色③還元	ロクロ調整。
7	須恵器 三筋盤	口 - 底 - 高 -	①砂粒②青灰色③還元	ロクロ調整。
8	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒②小橙色③焼成	粘土紐接合痕。
9	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒・青針②赤橙色③焼成	粘土紐接合痕。
10	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒・骨針②赤褐色③焼成	粘土紐接合痕。
11	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒・繩②赤橙色③焼成	粘土紐接合痕。
12	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒②小橙色③焼成	粘土紐接合痕。
13	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒②赤橙色③焼成	粘土紐接合痕。
14	製塙土器 鉢	口 - 底 - 高 -	①砂粒②赤橙色③焼成	粘土紐接合痕。
15	土製品 土壺	長さ 4.5 径 - 孔径 -	①砂粒②灰白色③焼成	巻きつけ。樽型。
16	土製品 土壺	長さ - 径 - 孔径 -	①砂粒②灰白色③焼成	巻きつけ。山取り。樽型。
17	土製品 土鉢	長さ 3.7 径 - 孔径 -	①砂粒②灰褐色③焼成	巻きつけ。樽型。
18	土製品 土鉢	長さ - 径 - 孔径 -	①砂粒②灰白色③焼成	巻きつけ。樽型。
19	土製品 土鉢	長さ - 径 - 孔径 -	①砂粒②灰白色③焼成	巻きつけ。樽型。
20	土製品 土壺	長さ - 径 - 孔径 -	①砂粒②灰白色③焼成	巻きつけ。樽型。

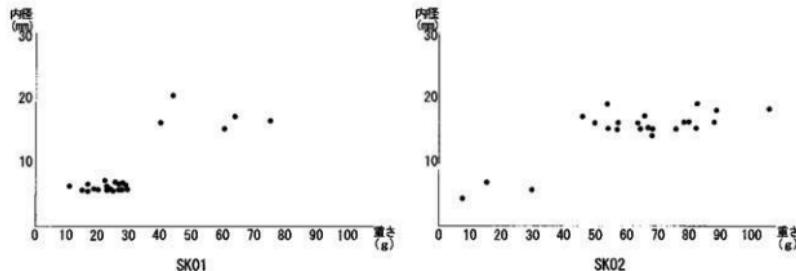
V 総括

今回の調査では、13-2・12-7・12-8・6-7・3-1・3-2・3-3・3-13・2-2の計9地点の発掘調査が実施されており、平成17年度の発掘調査での地区名に対応させると13-2・12-7・12-8の3地点がA地区、6-7地点がC地区、2-2・3-1・3-2・3-3・3-13の5地点がB地区となる。発掘調査で遺構・遺物が検出されたのは12-7・12-8・6-7の3地点だけで、前回の発掘調査でも遺構・遺物が希薄であったB地区に位置する3-1・3-2・3-3・3-13の各地点では遺構・遺物とともに検出されていない。

12-7・12-8地点

ここでは、12-7・12-8地点の性格と土錐について触れる。

12-7・12-8の両地点は、ともに平安時代の遺物が出土しており、遺構は12-7地点において検出されていないが12-8地点からは土坑と畑跡が検出されている。出土遺物の詳細な時期は池野正男氏の研究成果（池野正男 1997）を参考に検討すると次のようになる。本遺跡の上器群の特徴として、須恵器壺類が少なく、土師器椀類が多い点があげられ、食器類において須恵器壺類主体から土師器椀類主体への交換期は9世紀第四半世紀とされることより、上限がそれ以後となり、9世紀末～10世紀初頭までの土師器無台椀は口径11～13cm、それより後は12～13cmで、やや大型化するとされ、本遺跡の上器群は土師器無台椀の口径が11～12cmが主体になることより10世紀初頭以前が考えられ、以上より本遺跡の土器群は9世紀第四半世紀と推測される。土坑と畑跡の新旧関係は畑跡が古く、土坑が新しくなる。近接する平成17年度発掘調査区のA-1とA-2区では平安時代の畑跡を主体として土坑・溝が検出されており、畑が古く土坑・溝が新しいこと、遺物も須恵器双耳瓶や土錐が目立つなど12-8地点と共に通するが、遺物出土量の点でA-1・A-2の両区は微量なのに対して、12-8地点は多量に出土している点が異なり、遺物の多くが土坑・溝に伴うことから、その時期における中心的な遺構が12-8地点周辺に存在していたためと思われる。本遺跡A地区の性格についてはSK201・202より出土した遺物群から考えることができる。この遺物群は土錐・製塩土器が多く存在し、礫石や磨石が多くみられることが特徴といえる。礫石と磨石はカマドなどの構築材として縄文時代の遺物が他所より搬入された可能性もあるが、遺構構築材にむかないので比較的小さな例が見られること、一部に鉄製工具に刃痕が存在すること、偶然にしては出土量が多いことより平安時代の所産と考える。同時期の周辺遺跡で礫石と



第26図 土錐の重量×孔径グラフ

磨石がほとんど出土していないことより一般的な道具というよりも特殊性の強い道具といえ、何らかの生産用具とも考えられる。これらより鞆坂I遺跡A地区は一般的な集落遺跡に比較して土錐・製塩土器・敲石・磨石の出土量が多いことから生活の場というよりも生産の場的性格を有していたものと思われる。

土錐は、SK201とSK202より多量に出土している。SK201では重量が30g以下、孔径が0.6cm前後の例が多く、一網分の土錐が埋もれたかのような状況で集中して出土している。SK202では重量が40～90g、孔径が1.7cm前後の例が多く、大きく2ヶ所に分かれて出土しており、二網分の土錐が存在しているとも考えられる。仮に土錐出土状況の各集中が一網分だとすると、最少数で10個前後、最大数で詳細な出土位置が不明な包含層出土の土錐を考慮しても30個前後、20個強程度が予想される。これだけでは当時の網の土錐利用数がどの程度であったかは言えないが、本例のような出土状況の類例が増加することを期待したい。

6-7 地点

6-7地点は、宅地造成による削平が遺物包含層相当層まで及ぼす、本調査の対象外となったが一部層位確認のため深掘りを実施し、そこよりピット・溝が検出されている。遺物の出土は無いが平成17年度調査のC-4地区の層序を参考にすると中世に構築されたものと考えられる。
(折原)

参考文献

- 池野正男 1997 「越中における10・11世紀代の土器様相」
『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』 北陸古代土器研究会
富山市教育委員会 2005 『富山市鞆坂I遺跡発掘調査報告書』
戸溝幹夫 1983 「能登式製塩土器 型式分類とその変遷」
『北陸の考古学 石川考古学研究会会誌 第26号』 石川考古学研究会
細辻真澄 2001 「任海宮田遺跡出土の土錐について」
『紀要 第4号 富山考古学研究』 財團法人 富山文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所
細辻真澄 2003 「任海宮田遺跡出土の土錐について」
『紀要 第6号 富山考古学研究』 財團法人 富山文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所
藤田富士大 2002 「2. 古代郊外群の「郷」擬定と柳谷南遺跡の位置」
『富山市柳谷南遺跡発掘調査報告書 III』 富山市教育委員会



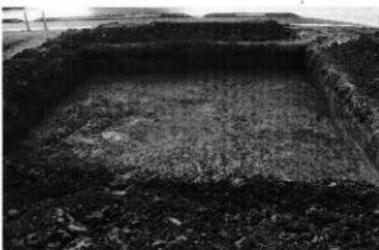
1 13-2 地点全景 北東より



2 12-7 地点全景 南より



3 6-7 地点全景 南より



4 3-1 地点全景 東より



5 3-2 地点 南より



6 3-3 地点 南より



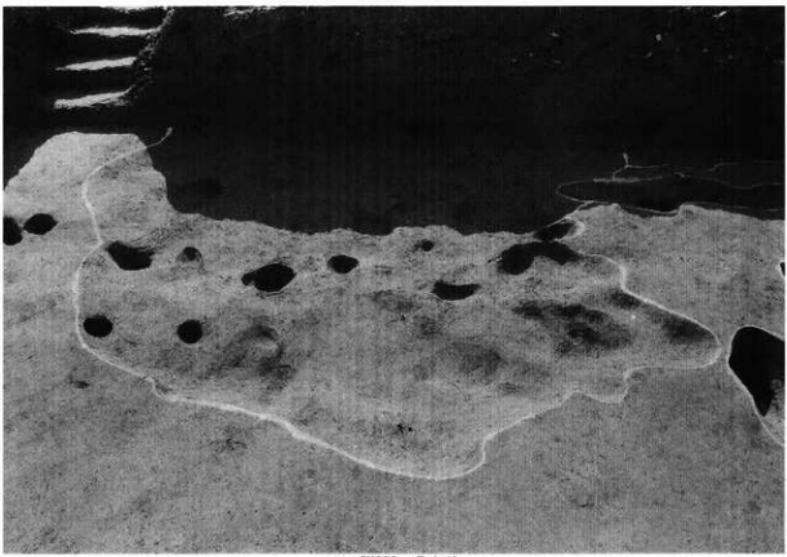
7 3-13 地点 東より



8 2-2 地点 東より



1 12-8 地点全景 東より



2 SK202 北より



1 SK202 遺物出土状況 東より



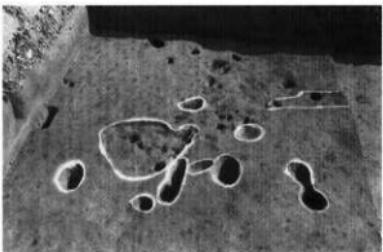
2 SK201 東より



3 SK201 遺物出土状況 東より

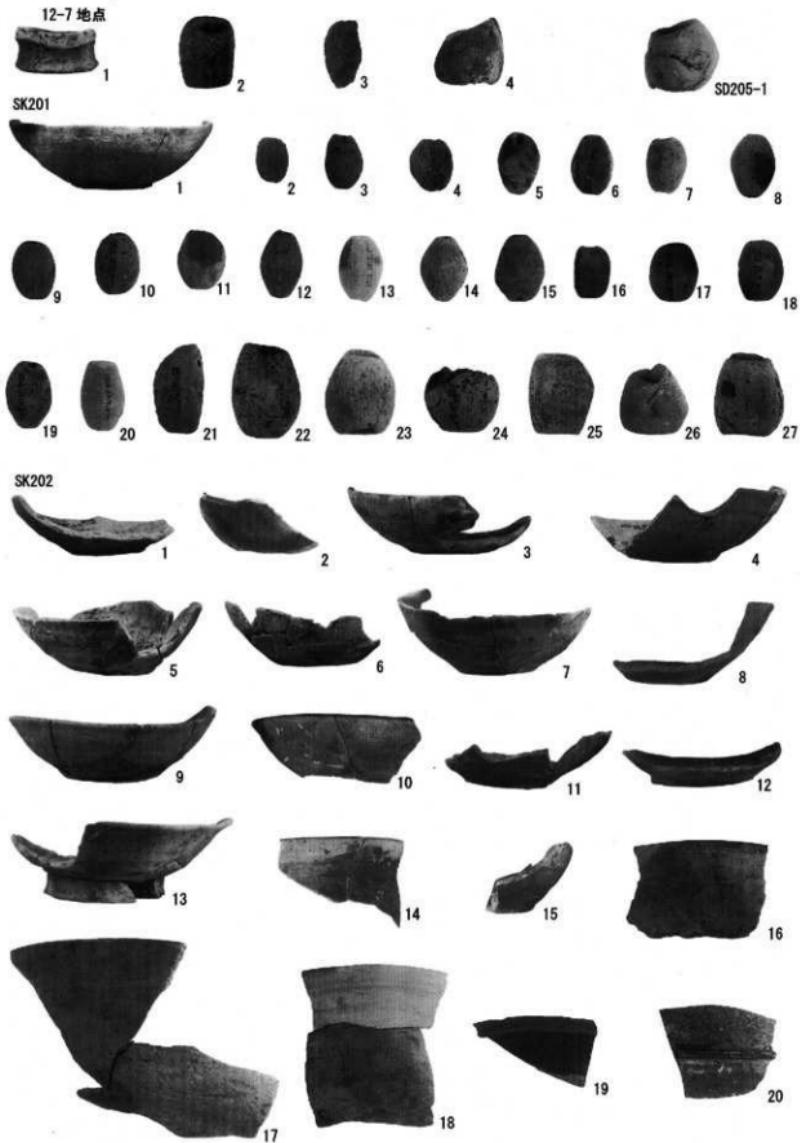


4 SD201 ~ 3・205 北より

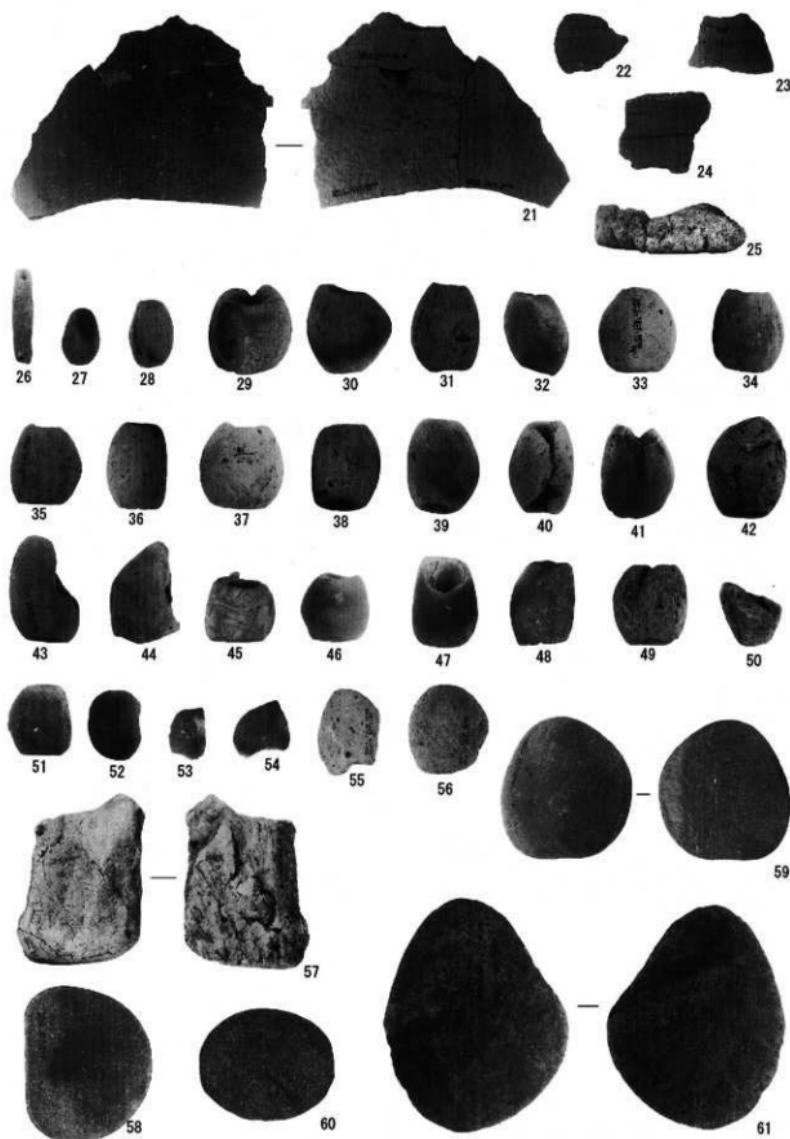


5 SD204 西より

図版
4

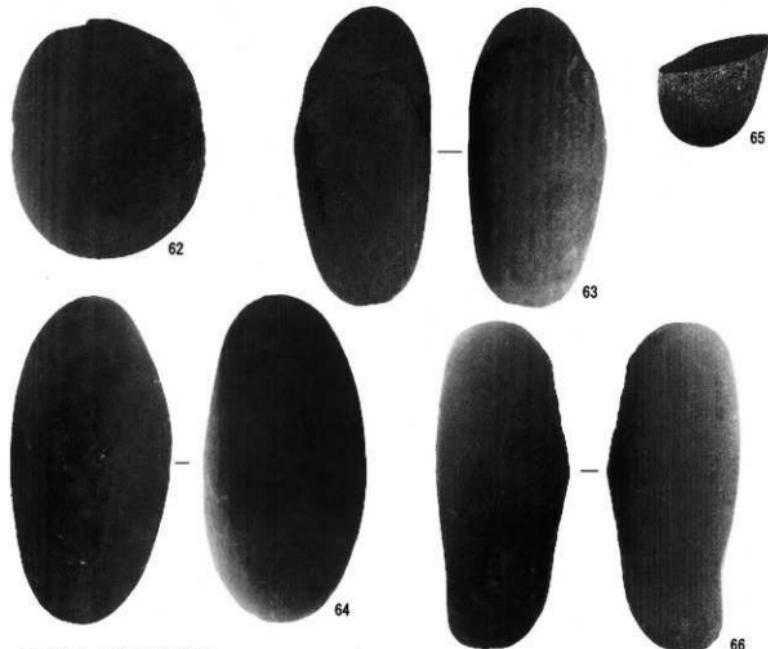


出土遺物 (1)

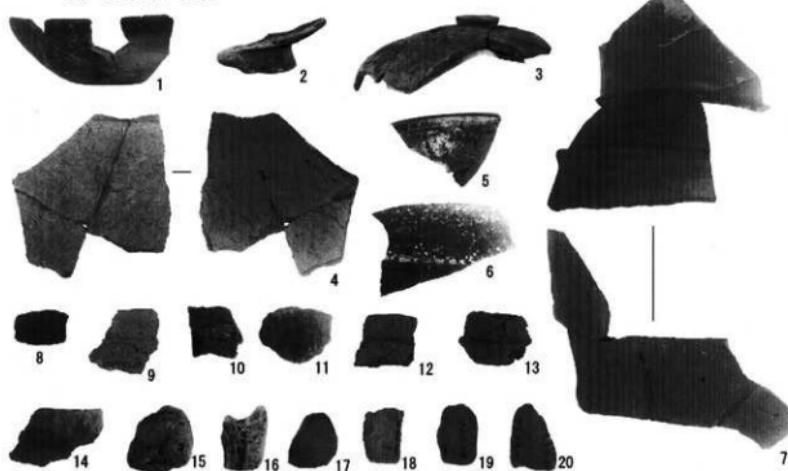


出土遺物（2）

圖版 6



12-8 地點 包含層出土遺物



出土遺物 (3)

報 告 書 抄 錄

富山市埋蔵文化財調査報告書 29

鶴坂 I 遺跡 発掘調査報告書

発行日 2008年8月30日
編集 山武考古学研究所
〒 286-0045
千葉県成田市並木町221番地
Tel. 0471-24-0536
発行 富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）
〒 930-0901
富山市愛宕一丁目2-24
Tel. 076-442-4246
Fax. 076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷 (株)京文社印刷
Tel. 043-242-0064

